指宿市埋蔵文化財調査報告書(3)

都市計画指宿駅西部土地区画整理事業
に伴う埋蔵文化財確認調査報告書

橋牟礼川遺跡

1980年　3月

鹿児島県指宿市教育委員会

例　　言

1. この報告書は指宿市教育委員会が国庫補助を得て実施した昭和54年度埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は都市計画指宿駅西部土地区画整理事業に伴う事前調査として実施した。
3. 発掘調査責任者　　指宿市教育委員会　　教育長　貳方忠雄
　　鹿児島県文化課　　主　事　弥栄久志
　　調査員　中島哲郎
　　〃　　井ノ上秀文
4. 本書の執筆は次のとおり

　第Ⅰ章　1・2……井ノ上　秀　文
　　3……弥　栄　久　志
　第Ⅱ章　1・2・4（3），（5）……井ノ上
　　3・4（1），（2），（4）……弥　栄
　第Ⅲ章……弥　栄

　実測，図面等の作成は弥栄・中島・井ノ上が中心となり，一部石器の実測・トレス等に宮田栄二（文化課調査員）の協力を得，他に県教育庁文化課埋蔵文化財係が補助した。
　なお写真撮影は弥栄が，本書の編集は3人が協議し，主として井ノ上がこれにあたった。

5. この報告書の作成にあたり，鹿児島県文化財審議員河口貞徳氏，鹿児島大学教授石川秀雄氏，指宿高校教諭成尾英仁氏の指導助言を得た。
6. 本書に用いたレベルの数値はすべて海抜高である。
7. 遺物の整理・復元・実測等は主として鹿児島県文化課収蔵庫の協力を得た。

本　文　目　次

第Ⅰ章　序

1　調査の目的及び調査団の構成 …… 6

2　位置と環境 …… 7

3　調査の経過 …… 11

第Ⅱ章　調査の概要

1　橋牟礼川遺跡の土層 …… 14

2　各地点の調査 …… 16

3　遺構 …… 19

4　遺物

（1）　縄文時代の遺物 …… 20

（2）　弥生時代の遺物 …… 20

（3）　古墳・奈良時代の遺物 …… 27

（4）　中世末から近世初期の遺物 …… 37

（5）　石　　器 …… 41

第Ⅲ章　まとめ …… 44

挿　図　目　次

第１図　指宿市内の主要遺跡 …… 9
第２図　調査地区と周辺の地形 …… 10
第３図　土層略図 …… 14
第４図　土層断面図 …… 15
第５図　調査区域内の地形及びトレンチ配置図 …… 17
第６図　17－１トレンチの住居址 …… 19
第７図　縄文時代の遺物（１） …… 21
第８図　縄文時代の遺物（２） …… 22
第９図　縄文時代の遺物（３） …… 23
第10図　縄文時代の遺物（４） …… 24
第11図　弥生時代の遺物（１） …… 25
第12図　弥生時代の遺物（２） …… 26
第13図　古墳・奈良時代の遺物（１） …… 30
第14図　古墳・奈良時代の遺物（２） …… 31
第15図　古墳・奈良時代の遺物（３） …… 32
第16図　古墳・奈良時代の遺物（４） …… 33
第17図　古墳・奈良時代の遺物（５） …… 35
第18図　古墳・奈良時代の遺物（６） …… 36
第19図　鉄鏃 …… 36
第20図　古墳・奈良時代の遺物（７） …… 37
第21図　古墳・奈良時代の遺物（８） …… 38
第22図　古墳・奈良時代の遺物（９） …… 39
第23図　中世末から近世初期の遺物 …… 40
第24図　石器（１） …… 41
第25図　石器（２） …… 42
第26図　石器（３） …… 43

表　目　次

第１表　指宿市内の主要遺跡 …… 8
第２表　各地点の調査 …… 16

図　版　目　次

図版１　遺跡遠景，12トレンチ北壁土層断面図 …… 47
図版２　10－１トレンチぐり石出土状況，12トレンチ遺物出土状況 …… 48
図版３　17－１トレンチ遺物出土状況，凹石出土状況 …… 49
図版４　石斧出土状況，須恵器出土状況 …… 50
図版５　縄文土器(1)，縄文土器(2) …… 51
図版６　縄文土器（浅鉢）(3)，縄文土器（深鉢）(4) …… 52
図版７　縄文土器(5)，弥生土器(1) …… 53
図版８　弥生土器(2)，弥生土器(3) …… 54
図版９　古墳・奈良時代の遺物(1)，古墳・奈良時代の遺物(2) …… 55
図版10　古墳・奈良時代の遺物(3)，古墳・奈良時代の遺物(4) …… 56
図版11　古墳・奈良時代の遺物(5)，古墳・奈良時代の遺物(6) …… 57
図版12　古墳・奈良時代の遺物(7)，古墳・奈良時代の遺物(8) …… 58
図版13　古墳・奈良時代の遺物(9)，古墳・奈良時代の遺物（土師器）(10) …… 59
図版14　古墳・奈良時代の遺物(11)，古墳・奈良時代の遺物(12) …… 60
図版15　古墳・奈良時代の遺物(13)，古墳・奈良時代の遺物(13′) …… 61
図版16　古墳・奈良時代の遺物(14)，中世末から近世初期の遺物(1) …… 62
図版17　中世末から近世初期の遺物(2)，中世末から近世初期の遺物(2′) …… 63
図版18　石器(1)・鉄鏃，石器(2) …… 64

第 I 章　　序

1. 調査の目的及び調査団の構成

都市計画指宿駅西部土地区画整理事業の実施に先立ち，遺跡の確認調査を実施し，これに基づいて，遺跡の保護と事業の推進を図るため昭和54年10月22日より昭和54年12月１日まで調査を実施した。

調査団の構成

調査主体者	指宿市教育委員会	
責任者	教　育　長	貳　方　忠　雄
事　務	庶務課長	秋　元　俊　行
担　当	社会教育課長	堀　口　次　雄
	係　　長	小牟礼　隆　憲
	主　　事	大岩本　　稔
	主　　事	広　森　弘　子
発掘調査員	県文化課主事	弥　栄　久　志
	調査員	中　島　哲　郎
	〃	井ノ上　秀　文

なお，発掘調査にあたり，多くの方々の協力と助言を得た。記して感謝の意を表します。

鹿児島県文化課々長・山下典夫，同専門員・本蔵久三，同埋蔵文化財担当職員
鹿児島県指宿教育事務所
指宿市都市計画課
鹿児島大学教育学部教授　石川秀雄
鹿児島県文化財審議員　河口貞徳
県立指宿高校教諭　成尾英仁

発掘調査協力者

吉元トシエ，吉元アヤ子，吉元マスエ，小牟礼キサエ，大小田テル，吉満チエ子，下ノ園ヒデ，小牟礼シズエ，小牟礼フミ子，亀ノ園サカエ，吉元静江，吉元ユキ，向吉照代篠原レイ子，下ノ園ヨミ子，浦崎フクエ，藤村ミセ，王子田フミ，有里ユキエ，中野アサ，徳元ミセ，中野イセツル，谷畑シナ，西原キクエ，西原ミツエ，鶴丸ミエ，西森キクエ，西村フミ，田代ケサマツ，戸森タエ，谷畑サクラ，中西ユキ，中野チヨ，中野ミヤ子，中野ケサマツ，堀口ヨネ，中野タツエ，山下ケサミツ，木野セキ，馬場畑スエ，馬場畑セツエ，瀬波サツキ，池ノ内タミ子，中村ユキエ，森田安子，森田キクエ，岡元トヨ，山口セキ子，宮畑シノブ，村崎キワ，中浜ミエ，今瀬ヒネ，中浜チカ，山口イネ松山サト，岡元チエ子，保田サワ，保田フイギク，木野カヨ，中川路フミ，加治佐サツ

ヨ，久保フジエ，田代ハルエ，吉元ユキエ，西森ヨシ，中西トシ子，餅原チエ子，中西キミ，広森富久美，大岩本一美

整理作業協力者

新つゆ，脇田みつえ，前之園俊子，喜入カツエ，川口セツ子，脇田睦子，中原己美子
相良政子，川口節子，山下治子

2. 位置と環境

指宿市は薩摩半島の東南部に位置し，北は喜入町と南は山川町及び開聞町と西は頴娃町と接しており，東は錦江湾に面している。指宿地方は霧島火山帯に属し，そのほとんどは阿多カルデラ内に含まれており温泉地としても広く知られている。指宿市と南接している開聞町にはコニトロイデ型の火山として有名な開聞岳があり，その活動は活発で有史以来いくつかの文献にその記録がみられる。青ゴラ，紫ゴラと呼ばれる開聞岳より墳出した溶結火山灰が広く南薩地方をおおっている。市の南西部には九州最大のカルデラ湖といわれる池田湖があり，その北側に鬼門平，東側に清見岳，唐山などが連っており，東側へ緩やかな丘陵を形成している。これらの山々からシラスの台地を浸蝕しながら港川や二反田川が東流して錦江湾へ注いでいる。橋牟礼川もその河川の１つである。

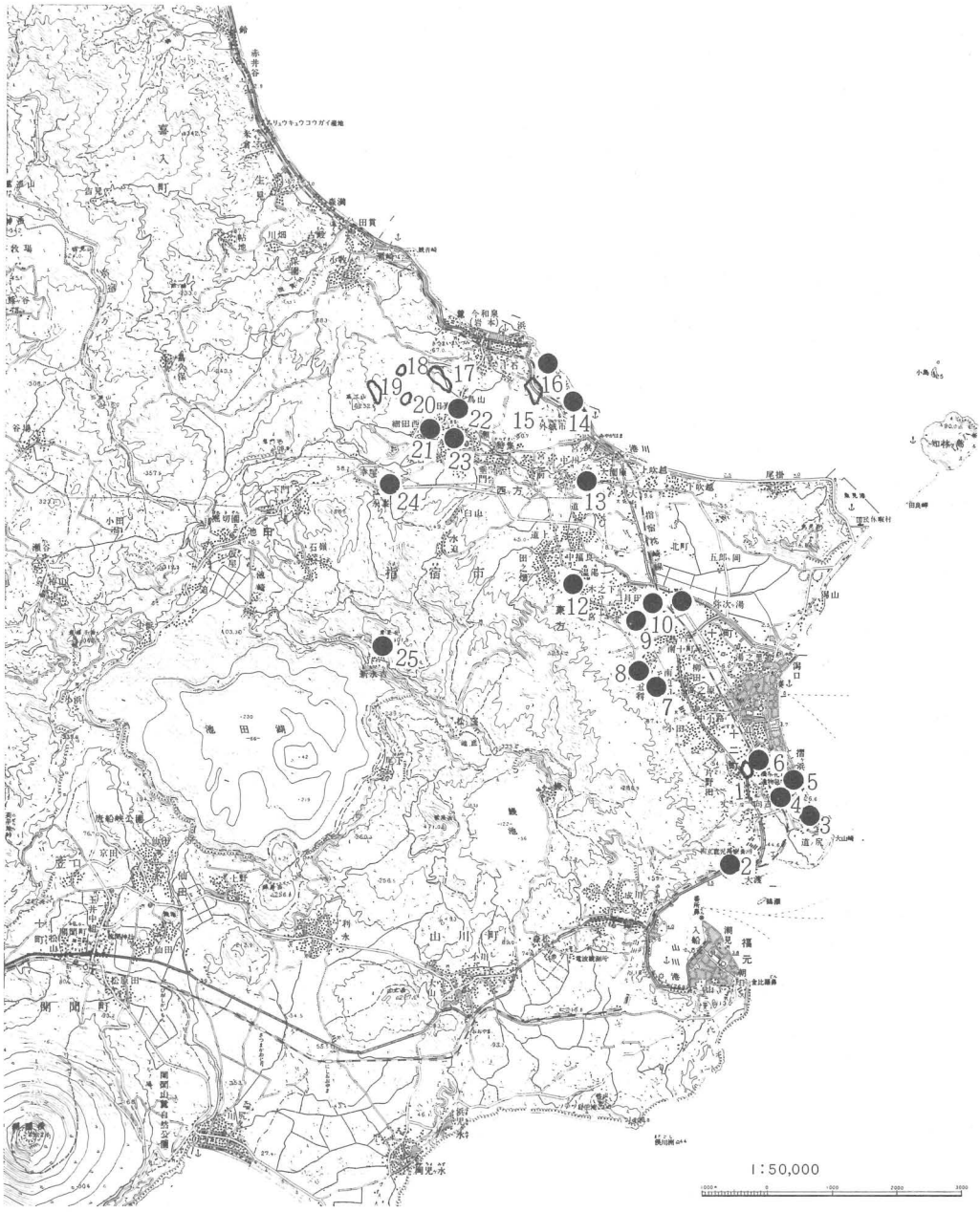
橋牟礼川遺物包含地は京都帝国大学の調査（大正７・８年）をはじめとして数回の発掘調査が行われており，上層に弥生土器，須恵器（祝部土器），下層に縄文土器（曲線式土器）を出土する遺跡として知られていた。（この橋牟礼川遺物包含地は大正13年に国の史跡に指定されている。）

今回の調査はこの指定地域に隣接した北側４２.１haを対象に行った。調査区域は指宿市の市街地に位置し，北側を逆瀬川，南側を橋牟礼川にはさまれており，ほぼ中央付近を丹波川が流れている。西側は国道２２６号線が走り，東側は指宿駅をはさんで指宿・枕崎線が走っている。唐山から海岸へ延びる丘陵の先端に位置し，逆瀬川を中心とする台地と，丹波川以南の橋牟礼川を中心とする台地の２つに分れる。この２つの台地にはさまれた地域は地表下約1.2ｍで水が湧出してきた。この調査区から海岸線までは約５００ｍで，高さは海抜約７ｍ～20ｍ以内に収まる。

指宿市内には多くの遺跡が知られている。その大部分は南丹波遺跡のように壷形土器，甕形土器，坩形土器を出土する遺跡や，おばこざこ遺跡，摺ケ浜遺跡，矢石遺跡，南迫田遺跡のように弥生土器や土師器を出土する遺跡である。縄文土器を出土する遺跡としては，後期の市来式や指宿式が出土して，住居址も発見された大渡遺跡，中期の阿高式や後期の市来式，指宿式，岩崎上層式が出土した渡瀬遺跡や大山崎遺跡，中川遺跡などがある。他に指宿高校校庭のように弥生土器や土師器，須恵器などとともに貝殻を出土する遺跡もある。

第１表　指宿市内の主要遺跡

	遺跡名	所在地	時代	地形	備考
1	橋牟礼川遺物包含地	十二町丈六下里橋牟礼川	縄文中・後・晩 弥生中・後期	台地	黒川式・夜臼式・市来式・阿高式 成川式・人骨・住居址
2	大渡	十二町大渡	縄文後期	台地	市来式・指宿式・人骨
3	大山崎	十二町大山崎	縄文後期	〃	市来式・指宿式
4	朝鮮ケ岡	十二町朝鮮ケ岡	弥生後期	〃	壷形土器
5	摺ケ浜	十二町摺ケ浜	弥生後期	〃	壷形土器・高坏
6	南丹波	十二町南丹波	弥生後期	〃	壷・甕形土器・凹石
7	南迫田	十町南迫田	弥生後期	〃	
8	大円寺跡	十二町小田大円寺	奈良	〃	穴地蔵・千手観音木像
9	光明寺跡	十町迫田	奈良	〃	扁額「円通南仙書」
10	指宿高校校庭	十町２３６	弥生後期	〃	弥生土器・土師器・須恵器
11	矢石	十町二月田矢石	弥生後期	〃	甕形土器
12	道上	西方道上	弥生後期	〃	壷・甕形土器
13	中川	西方中川	縄文後期 弥生後期	〃 〃	市来式・草野式・指宿式 住居址
14	松尾城跡	西方６８０３	歴史	〃	堀あと
15	外城市	西方外城市	弥生後期	〃	
16	おばこざこ	西方尾長谷川迫7420	弥生後期	〃	壷・甕形土器・高坏・石斧
17	鳥山（１）	新西方鳥山		〃	土師器・須恵器
18	鳥山（２）	〃		〃	土師器・須恵器
19	鳥山（３）	〃		〃	土師器・須恵器
20	細田東後	新西方細田東後		〃	土師器・須恵器
21	舟木	新西方舟木迫		〃	土師器，須恵器
22	鳥山	新西方鳥山		〃	石斧・敲石
23	渡瀬	新西方渡瀬	縄文中・後期	〃	阿高式・市来式・指宿式
24	幸屋	新西方幸屋		〃	土師器・須恵器
25	清見城跡	池田清見城	歴史	山地	



第１図　指宿市内の主要遺跡

第２図　調査地区と周辺の地形

3. 調査の経過（日誌抄）

昭和54年10月22日（月）

本日より調査開始。7ケ所のトレンチ設定。

10月23日（火）

1～6トレンチの調査にはいる。午後8ケ所のトレンチを設定

10月24日（水）

8，9，10，11，13トレンチの設定。1～7トレンチⅣ層まで調査。3，7トレンチは湧水で中止。8，9，10，11，13トレンチは本日より調査開始。

10月25日（木）

1，2，12，13，18，19トレンチはⅣ層ないしⅤ層途中。8，9，10，11トレンチはⅠ層からⅡ層。

10月26日（金）

1トレンチを3×7mに拡張。2トレンチを4×4mに拡張。8，9，13，14トレンチはⅤ層途中。10トレンチはⅡ層。18トレンチはⅥ層途中。

10月29日（月）

1，2トレンチは拡張区の調査。8，9，11，12，18，19トレンチはⅤ～Ⅵ層途中。10トレンチは4×4mに拡張。階段状にぐり石が出土。13トレンチは3×5mに拡張。18トレンチはⅦ層上面。19トレンチはⅥ層途中。

10月30日（火）

1，12，14，19トレンチはⅧ層途中。2トレンチは拡張区途中。8，13トレンチはⅤ～Ⅵ層途中。9トレンチはⅨ層で終了。18トレンチは平板実測，写真撮影，遺物取り上げ。

10月31日（水）

1，2，14，19トレンチはⅧ層途中。10－2トレンチ設定。11トレンチはⅤ層。17トレンチはⅥ層途中。12，13トレンチは写真撮影，カード打ち（Ⅷ層）。9トレンチは埋め戻し。

11月1日（木）

1，12，14，18トレンチはⅧ層。8，9トレンチは終了。10－2は中世の遺物出土。11トレンチはⅤ層。12トレンチは遺物とりあげ。13トレンチはⅥ層上面。15，16トレンチはⅡ層途中。17トレンチはⅥ層途中。

11月2日（金）

1，12，14，15，18，19トレンチはⅧ層途中。10－2トレンチは中世面。11，17トレンチはⅥ層途中。

11月5日（月）

今後の調査進行の打ち合せ。図面整理。

11月6日（火）

1，11，12，14，15，18トレンチはⅧ層途中。10－2トレンチは断面図作成。16，17トレンチはⅥ層途中。

11月8日（木）

11，12，18トレンチはⅧ層，19トレンチは平板図作成。遺物取り上げ。

11月9日（金）

1トレンチは写真撮影，遺物取り上げ，埋め戻し。10－1トレンチはⅢ層，10－2トレンチは断面図作成。11，13，14，15，16，18トレンチはⅧ層途中。19トレンチはⅧ～Ⅸ層。

11月12日（月）

1トレンチは埋め戻し。2トレンチはカード打ち。10－2トレンチは断面図作成。10－1トレンチで鉄鏃出土。11トレンチは三津永田式土器出土。12トレンチはカード打ち。14，18トレンチはⅧ層。19トレンチはⅨ層。

11月13日（火）

1，10－2トレンチは埋め戻し。10－1トレンチはⅥ層途中，11，13，14トレンチはⅧ層途中。12トレンチは遺物取り上げ。

11月14日（水）

10－1トレンチは遺物取り上げ。10－2トレンチは埋め戻し。11トレンチは写真撮影12，19トレンチはⅨ層。14，15トレンチはⅧ層途中。

11月15日（木）

10－1，10－2トレンチは埋め戻し。12トレンチはⅨ層。14，15トレンチはⅧ層。18トレンチはカード打ち。19トレンチはⅨ層途中。

11月16日（金）

2トレンチは平板図作成，遺物とりあげ，埋め戻し。10－1トレンチは埋め戻し終了。12トレンチはⅨ層のカード打ち。13トレンチは埋め戻し。14，15トレンチ埋め戻し終了。19トレンチはⅨ層途中。

11月19日（月）

12，18トレンチは遺物取り上げ終了。本日は図面作成のため作業員を休ます。河口貞徳氏，石川秀雄氏来跡。

11月20日（火）

11，17－1，18，19トレンチの平板図作成。

11月21日（水）

11トレンチはⅧ層，12，18トレンチはⅨ層，17－1，17－2トレンチはⅥ層，19トレンチはⅩ層途中。

11月22日（木）

11トレンチはⅧ層下部。12トレンチは埋め戻し。17－1，17－2トレンチはⅥ～Ⅷ層。18，19トレンチはⅩ層途中。

11月26日（月）

11トレンチはⅨ～Ⅹ層。14，15トレンチは平板図作成。17－1，17－2トレンチはⅧ層途中。18，19トレンチはⅩ層途中。

11月27日（火）

11，14，15トレンチは断面図作成。埋め戻し。17－1，17－2トレンチはⅧ層。18，19トレンチはⅩ層。

11月28日（水）

13トレンチは平板図作成，埋め戻し終了。15トレンチは埋め戻し終了。16トレンチは平板図作成，遺物取り上げ，断面図作成，埋め戻し終了。17－1，17－2トレンチは平板図作成，遺物取り上げ（一部）。

11月29日（木）

17－1，17－2トレンチ遺物取り上げ，18トレンチは平板図作成。17－2トレンチは埋め戻し。

11月30日（金）

18トレンチは遺物取り上げを行い埋め戻し。19トレンチは平板図作成，遺物取り上げ断面図作成。

12月1日（土）

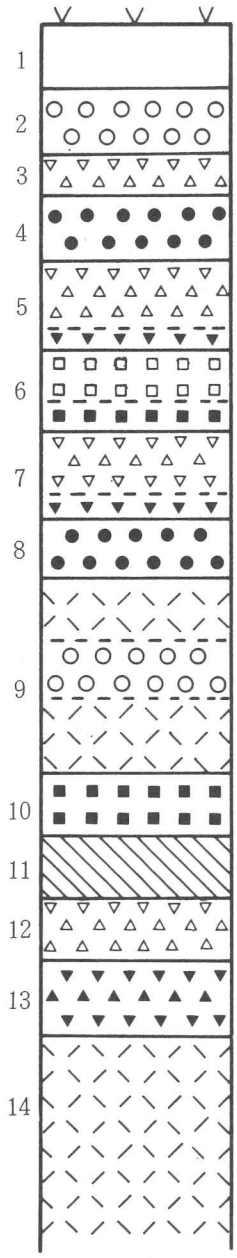
18トレンチは埋め戻し。19トレンチはⅩ～ⅩⅣ層まで掘り下げた後埋め戻し。

本日で発掘調査終了。

昭和55年2月7日（木）より報告書作成にはいり，3月12日に印刷所へまわす。

第Ⅱ章　調　査　の　概　要

1.　橋牟礼川遺跡の土層



耕　作　土

礫混り黒色火山灰層

明紫色溶結火山灰層　　開聞岳噴出物（885年？）

灰褐色火山砂礫層

紫色溶結火山灰層　　開聞岳噴出物（紫ゴラ）（874年？）

暗黄褐色スコリア火山礫層

暗褐色砂礫混入粘質土層

灰色砂層　　開聞岳噴出物（青ゴラ）

暗青灰色溶結火山灰層

暗青褐色スコリア火山礫層

暗褐色小礫腐植土層

赤褐色小礫混入土層

褐色土層

赤褐色小礫混入土層

暗赤褐色粘質土層

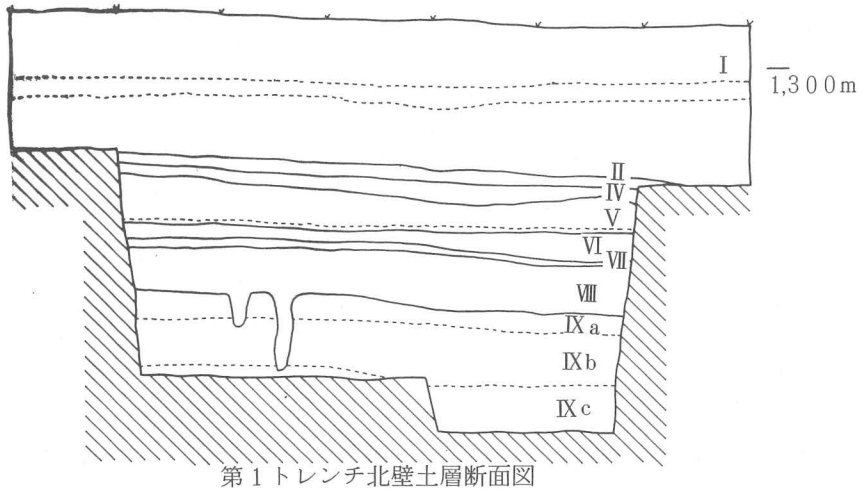
褐色砂礫混入粘質土層

灰色溶結火山灰層　　開聞岳噴出物

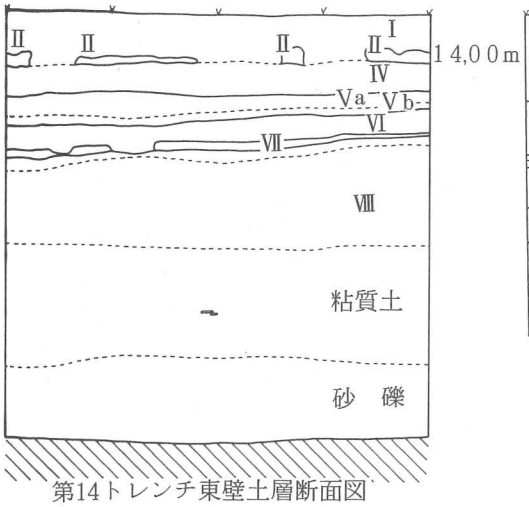
暗褐色粘質土層

明茶褐色砂混入粘質土

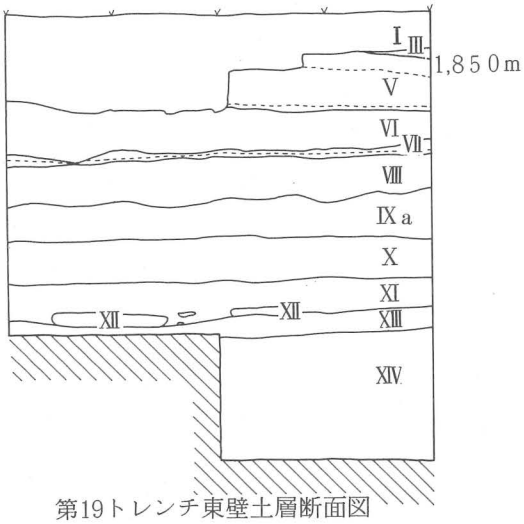
第3図　土層略図



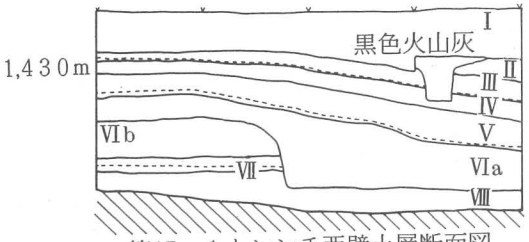
第１トレンチ北壁土層断面図



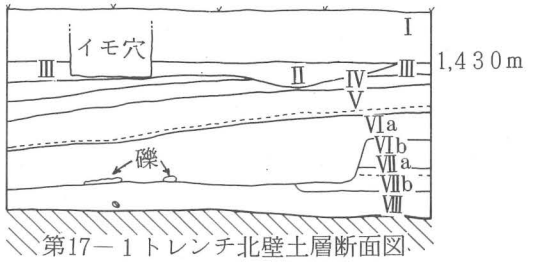
第14トレンチ東壁土層断面図



第19トレンチ東壁土層断面図



第17－１トレンチ西壁土層断面図



第17－１トレンチ北壁土層断面図

第４図　土層断面図

2. 各地点の調査

発掘調査地点の設定は事業の対象区全体を50m×50mのグリッドを設け，地形を考慮しながら橋牟礼川に近い場所を中心に，4m×4mと3m×3mのトレンチを全体的に設定した。遺物の出土した個所は一部拡張したり，トレンチの数を増して確認を行った。トレンチの番号は1から19までである。

下の表は各トレンチの面積やおおまかな調査内容の一覧である。

第2表　　各地点の調査

トレンチ	区	面積・深さ(m)	内容
1	C－3	3×7×3.8	弥生土器，成川式（Ⅶ層）
2	E.F－2	4×4×3.4	成川式（Ⅷ）　弥生土器，石鏃，黒曜石剥片（Ⅸ）
3	H－5	3×3×1.6	遺物なし，水湧出
4	K－8	3×3×1.3	〃　〃
5	K－9	3×3×1.4	〃　〃
6	N－9	3×3×1.4	〃　〃
7	L－9	3×3×1.5	〃　〃
8	M－13	4×4×3	〃
9	N－13	4×4×3.9	〃　水湧出
10－1	N－16	4×5×2.8	火鉢，皿（Ⅰ）　成川式，鉄鏃（Ⅷ） Ⅰ層中に階段状に軽石のぐり石
10－2	N－16	4×4×4.2	擂鉢，陶器（Ⅰ）
11	Q－16	4×4×4	弥生中期壷底部，三津永田式甕棺，成川式（Ⅷ）
12	Q－17	4×4×2.2	須恵器，成川式（Ⅷ），土製円盤，弥生土器，成川式（Ⅸ）
13	R－17	3×7×0.8	成川式（Ⅵ，Ⅷ）　獣骨（Ⅵ）
14	S－16	4×4×4	成川式（甕，壷，鉢，坩，高坏）（Ⅷ）
15	T－16	4×4×2.6	弥生土器，成川式，須恵器（Ⅷ）
16	T－19	3×3×2.6	成川式，須恵器，敲石（Ⅵ），成川式（Ⅷ）
17－1	S－19	4×4×2	成川式，須恵器，土師器，敲石（Ⅵ），住居址
17－2	S－19	4×4×1.8	成川式，須恵器（Ⅵ）
18	R－19	4×4×2.2	成川式，須恵器（Ⅵ），成川式，打製石斧，貝殻（Ⅷ） 打製石斧（Ⅸ），縄文晩期深鉢（Ⅹ）
19	Q－20	4×4×4.2	成川式（Ⅵ，Ⅷ），夜臼式（Ⅸ），黒川式（Ⅹ），曽畑式（ⅩⅣ）

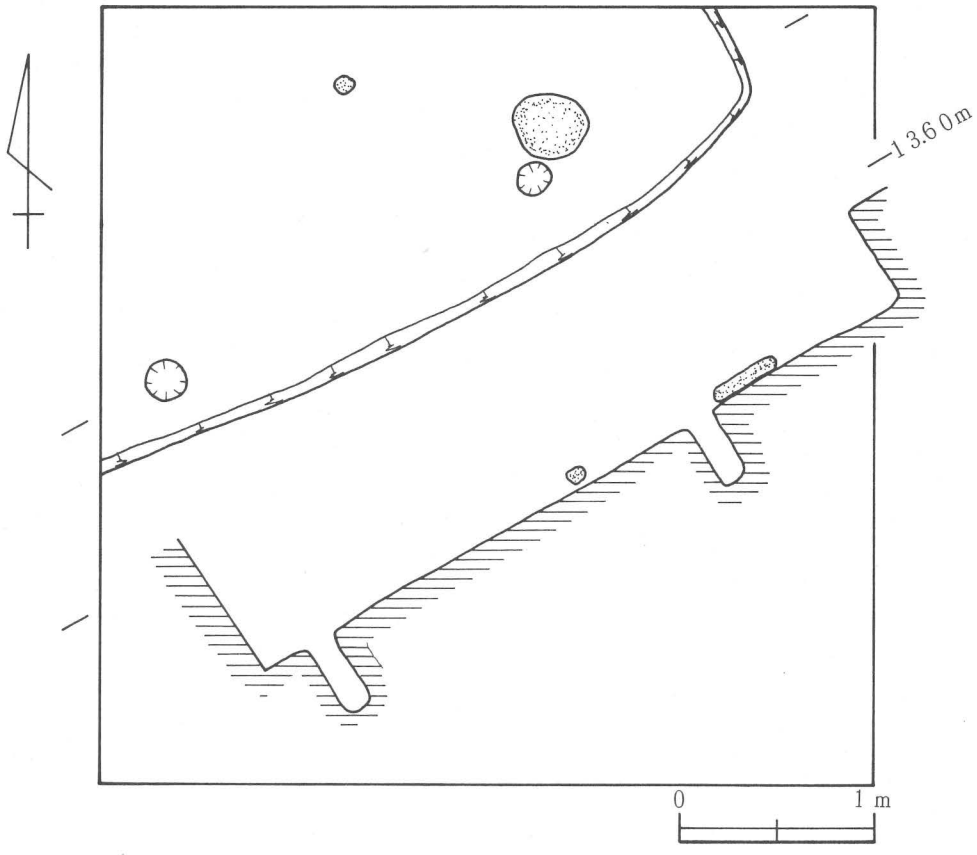
3. 遺　構（住居址）

17－1トレンチのⅥ層に検出された方形の竪穴住居址である。第6図のごとくトレンチは南半分近くにはいったと思われる。竪穴の深さは40～50cmで2個の柱穴が南壁にみられた。柱穴の深さは床面よりも25～30cmで直径18cmと16cmである。柱間は1m70cmであり東柱穴と東壁面関係を西壁面の位置にあわせると一辺が3m80cmの住居址と思われる。

床面には直径28cm，厚さ8cmの扁平状円礫が柱穴近くに置かれたように出土している。

出土遺物は貼り付け突帯をもち口縁部が内行する成川式土器の甕形土器や鉢形土器（**153，156，158**），坩形土器（**123**）が出土している。成川式土器に伴い，須恵器（**169，173，181，185**），と土師器（**164**）が出土している。遺物は細片に割れており残りは良くない。住居址の周辺には須恵器の壷（**180,**）や坏（**175**），蓋（**168**）や土師器（**162，163**），成川式土器（**85**等）が出土している。

住居址の埋土状況は廃居になった後いくらか腐植土が埋まり，まだ凹地の状態で第Ⅴ層（紫色溶結火山灰層とスコリア火山礫層）が堆積した状況が第4図の断面図に出ている。



第6図　第17－1トレンチの住居址

4. 遺　物

（1）縄文時代の遺物

1　晩期Ⅲ式（第7図1～23）

1，2，3，4，5，6，7，8，9，10は甕形土器の口縁部である。色調は3の黒色以外は明褐色を呈している。幅広い刻目突帯をもち，3，4，5以外は刷毛目条痕を施す。胎土，焼成は全体的に良い。これらは主にⅨ層に出土している。11は表面が明紫褐色，裏面は黒褐色を呈す。胎土は良いが焼成があまり良くない。18トレンチのⅨ層に出土している。12，13，15，は暗褐色を呈した粗製の土器で胎土，焼成共に良い。12トレンチのⅨ層に出土している。14は暗褐色を呈した粗製の土器で，胎土，焼成共に良い。18トレンチのⅨ層に出土している。以上が鉢形土器である。16，17，18，19は褐色を呈した研磨土器である。16，17，18は浅鉢で19はマリ状の土器である。胎土，焼成共に良く，夜臼期の土器である。20，21，22，23は明紫褐色を呈し，胎土，焼成共に良く，若干上げ底であり，Ⅸ層に出土した夜臼期の底部である。

2　晩期Ⅱ式（第8図24～38）

24，25，26は暗赤褐色を呈し胎土，焼成は良い。粗製で外反する甕形土器の口縁部である。27は同じ甕形土器の口縁部であるが内曲する。28，29，30，31，32，33，34，35，36，37は黒色研磨土器の浅鉢である。28，29，30，33は狭口の浅鉢で32，34は広口の浅鉢である。28は口唇部に2連の貼付突起をもち，33は口縁部に丹が塗られている。36は頸部，肩部のくびれがするどい。35は研磨度が弱く，部分的に刷毛目条痕がみられる。37，38は平底の底部である。円盤状をしているが円盤貼付ではない。粗製土器であるため甕形土器の底部であろう。これらの土器はⅨ層，Ⅹ層，Ⅺ層に分かれて出土しているがⅩ層が主体となっている。またこれらは晩期Ⅱ式でも初期にあたると思われる。

3，市来式土器（第9図39～50，52）

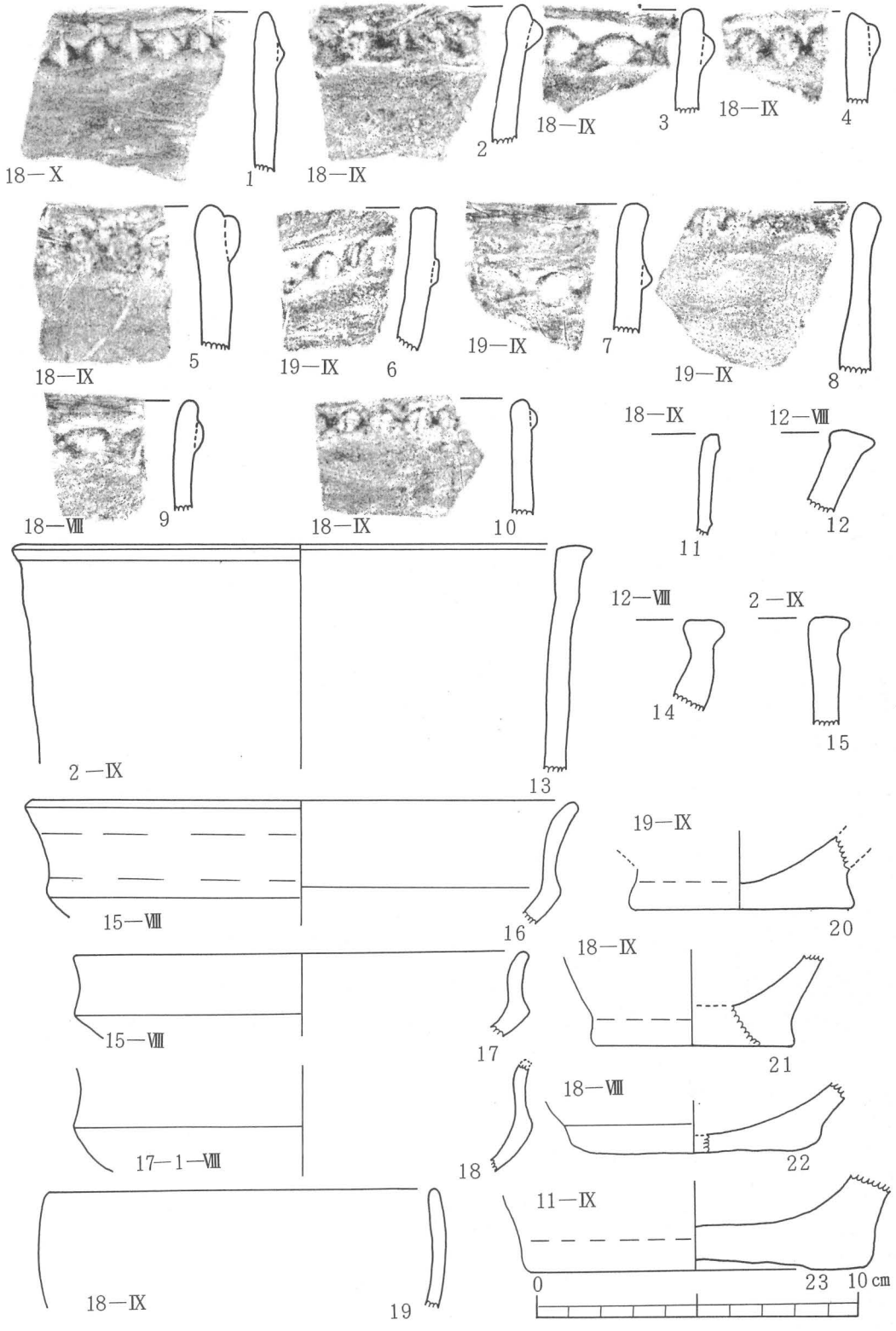
39，40，41，42，43，44，45，46，47，48，52は貝殻刺突文と沈線文を施した土器である。49，50は貝殻刺突文や沈線文がなく，地文の貝殻条痕文のみである。器形としては断面三角形をもつ市来式そのものを表わしている。

4，その他の土器および土製品（第10図51，53～58）

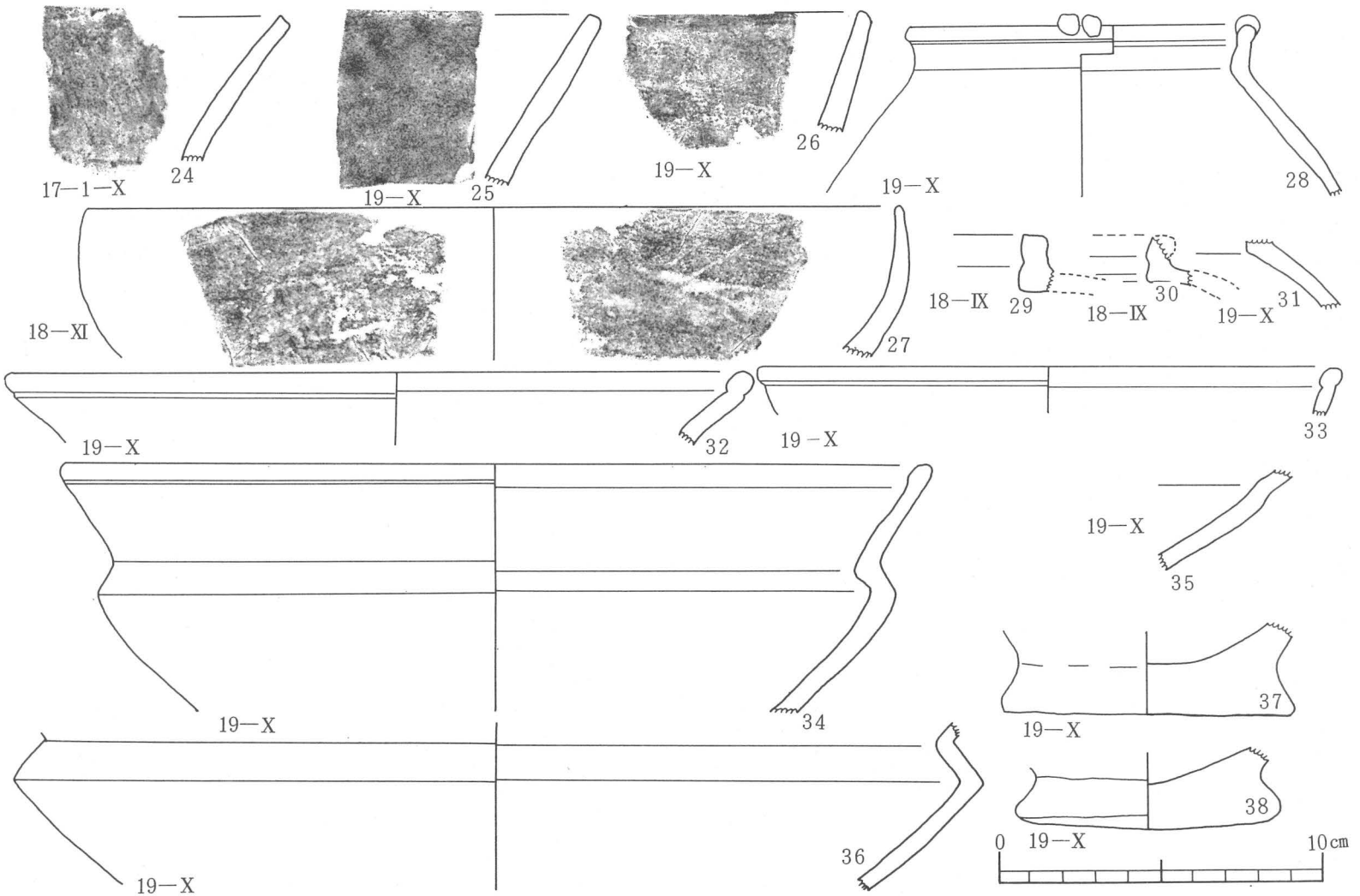
51は研磨されている土器であるが形式不明，54，55は指宿式土器である。53は2列の連点文と細長い刻目文を組み合せ，胎土粒の細かい土器である。九州にはあまりみられない土器と思われる。55（2次堆積）以外はⅩ層に出土している。56はⅩⅣ層に出土した曽畑式である。57，58は土製円盤で，57は市来式土器でつくられている。

（2）弥生時代の遺物（第11図，第12図）

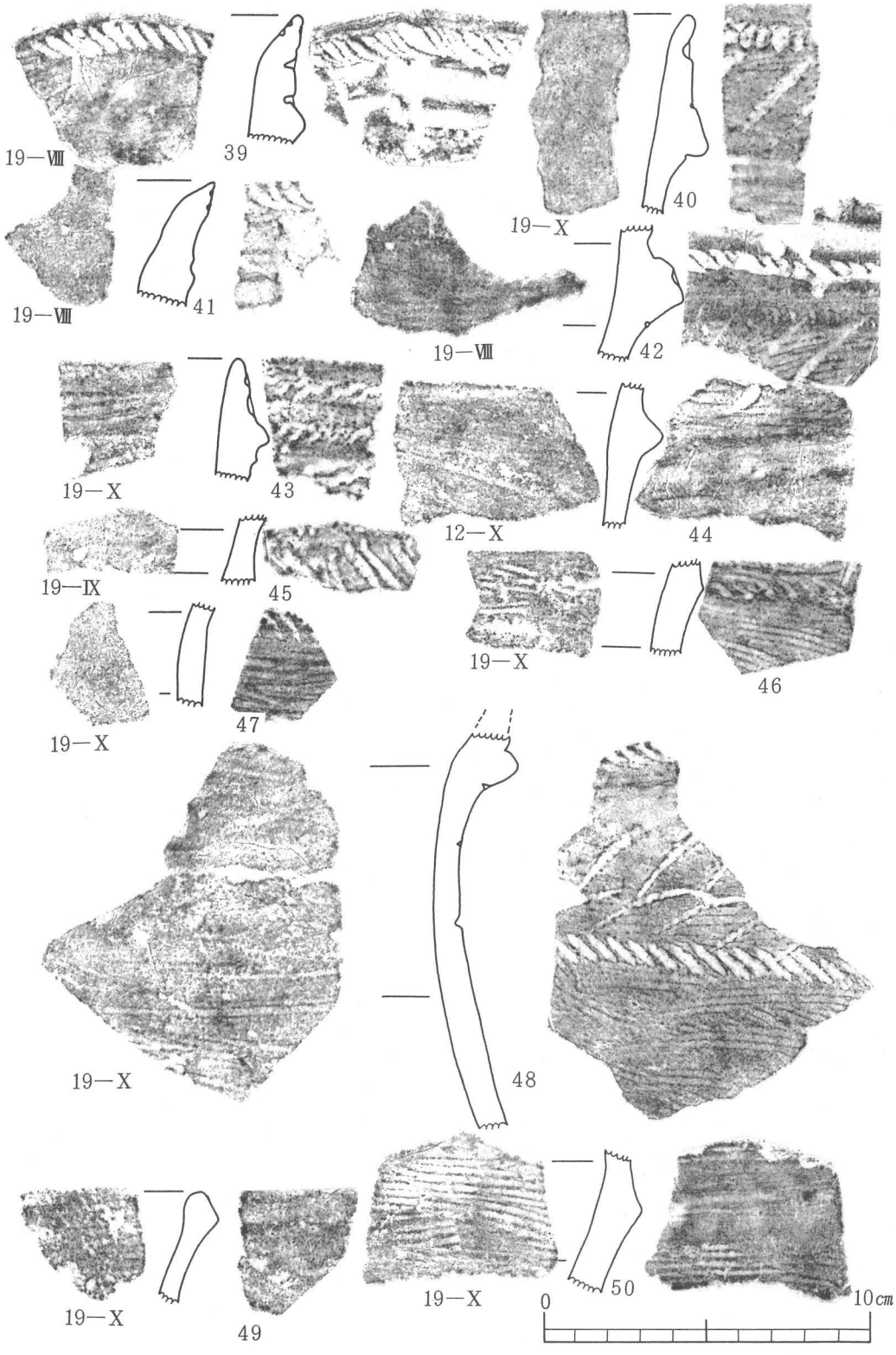
59～67は口縁部がL字を呈す前期末～中期初頭の弥生土器の甕形土器である。59，60，61は口縁部に刻目を施し，他は施していない。形式としては入来式土器に類すると思われる。59には刷毛目調整痕がある。68，81は中期末の三津永田系土器と思われる。2重口縁をもった甕



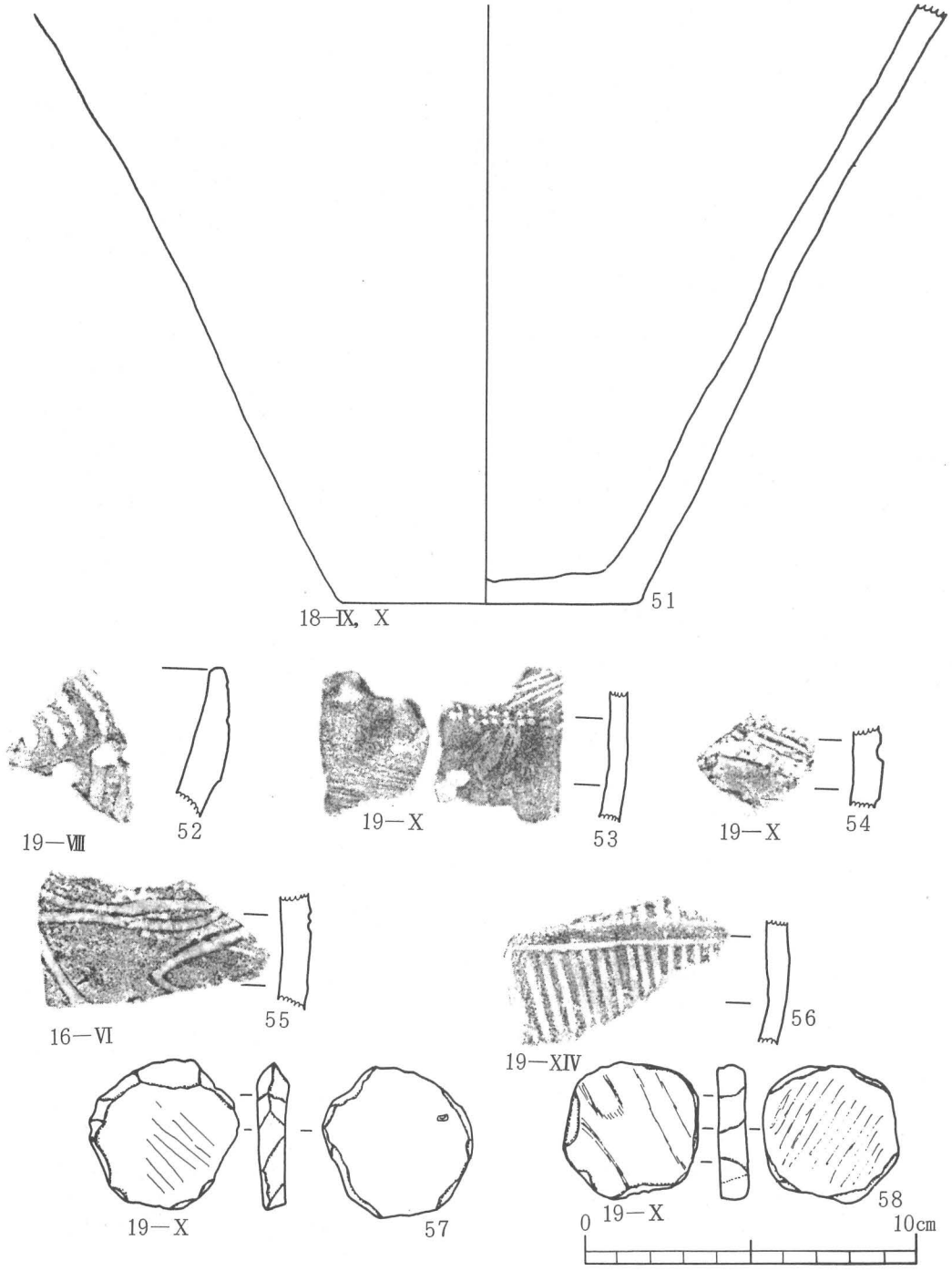
第 7 図　縄文時代の遺物(1)



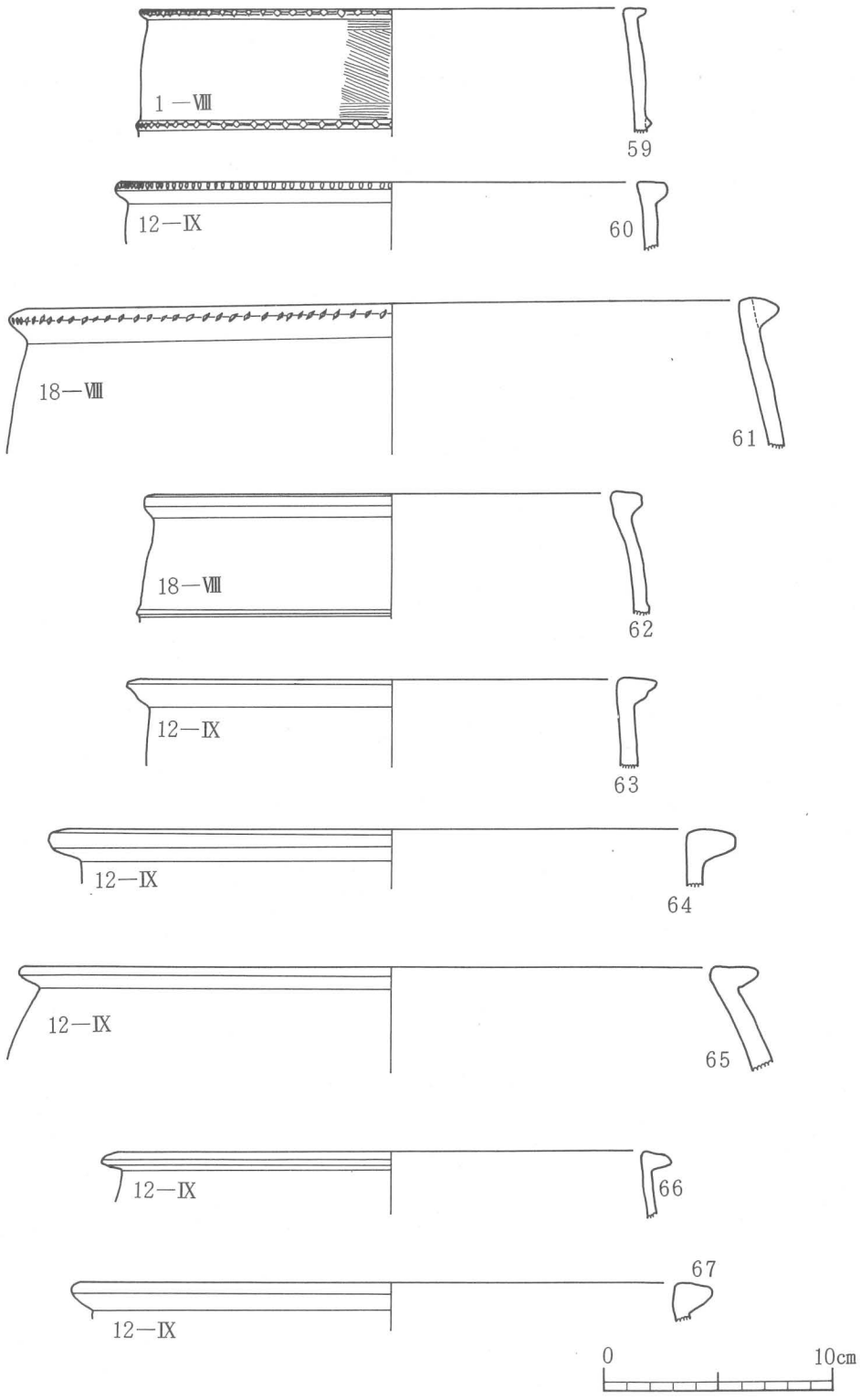
第 8 図　縄文時代の遺物(2)



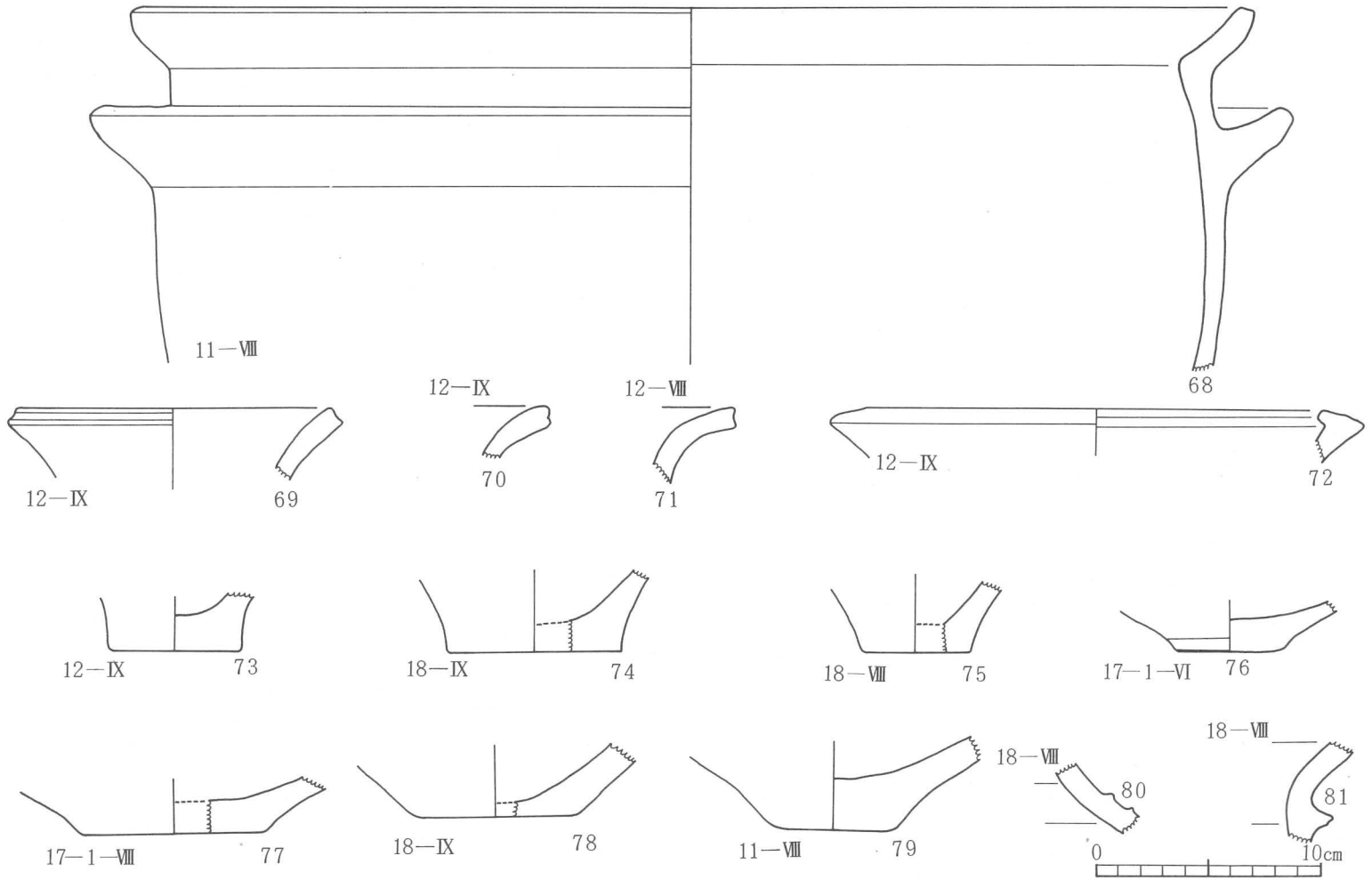
第 9 図　縄文時代の遺物(3)



第10図　縄文時代の遺物(4)



第11図　弥生時代の遺物(1)



第12図　弥生時代の遺物(2)

形土器であり，68は内側に稜がみられる。69，70，71，72は中期の壷の口縁部と思われる。73，74，75は前期末の甕の底部と思われる。76，77，78，79は前期末～中期初頭の壷の底部と思われる。これらの土器はⅧ，Ⅸ層に出土している。

（3）古墳・奈良時代の遺物

1　成川式土器

甕形土器（第13図82～第15図112）

82は復元口径約32.5cmで，口縁部は内彎しており，内外面ともヘラで横位に整形されている。色調は内外面とも淡茶褐色を呈しており，胎土はややあらく，焼成は良好である。83は復元口径約30.5cmで口縁部は内彎している。内外面とも刷毛による横位の整形痕がみられる。色調は内面は褐色，外面は明褐色を呈しており，胎土はややあらく，3mm大の小石の混入が認められる。焼成は良好である。84は復元口径約33.5cmでこれも口縁は内彎している。色調は内面は淡赤褐色で外面は灰褐色である。胎土に砂を多量に混入している。焼成は良好である。85は復元口径約21cmで口縁部は内彎している。内面はヘラによる横位の整形痕がみられる。外面の突帯より上部は刷毛による横位の整形で，下部はヘラによる縦位の整形痕が認められる。色調は内外面ともに灰褐色を呈している。胎土はややあらく砂を含み，焼成は良好である。86は内外面ともヘラによる横位の整形痕がみられる。色調は内外面とも明赤褐色で，胎土，焼成とも普通である。87は復元口径21cmで，内面は淡茶褐色，外面は褐色を呈している。胎土はややあらく焼成は普通である。外面に一部ススの付着がみられる。88は内面にヘラによる横位の整形痕がみられる。色調は内外面とも灰褐色である。胎土，焼成ともに普通である。

89～94は甕の底部である。90，91，93のようにわずかに脚のつくものと94のように長い脚のつくもの，その中間のもの（94）がある。89は脚の部分がはずれたものである。外面にヘラの縦位の整形痕がみられる。色調は内外面ともに灰褐色である。胎土は砂を含み，ややあらい。焼成は普通である。90は外面は指による整形痕がみられる。色調は内外面とも淡赤褐色を呈している。胎土は普通で，焼成は良好である。91は脚のとりつけ部分に内と外から指でつまんだのではないかと思われる痕跡がみられる。内面は明黄褐色で，外面は褐色を呈している。胎土はややあらく，焼成に良好である。92は脚部の外面にヘラによる縦の整形痕がみられる。色調は内外面ともに淡黄褐色である。胎土は砂を含み，中には4mm大の小石も含む。焼成は良好である。93は内外面ともていねいに整形されており，外面にはヘラによる縦位の整形痕がみられる。色調は内面は褐色で，外面は淡茶褐色である。胎土はややあらく，焼成は良好である。

95は復元口径約30cmで，口縁部はほぼ直行している。外面には刷毛による横位の整形痕がみられる。色調は内外面とも淡灰色である。胎土は砂を多量に含んでおり，ややあらい。焼成は良い。96は復元口径32cmである。突帯から胴部にかけてヘラ状の施文具で刻目を入れている。内外面ともに刷毛による横位の整形痕がみられる。胎土は砂を含みややあらい。焼成は良好である。97は突帯にやや広い間隔で刻目を入れている。内外面とも刷毛による横位の整形である。

色調は内外面とも明灰色である。胎土に砂を含んでいる。焼成は良好である。98も突帯に刻み目を施しているが，97より間隔は狭い，色調は内外面とも淡褐色である。胎土はややあらく焼成は良好である。99は内外面とも灰色を呈しており，胎土はややあらく，焼成は良好である。１００は口縁部が外反している。内外面ともに刷毛による横位の整形がなされている。色調は内外面とも淡黄褐色を呈している。胎土，焼成とも普通である。１０１は復元口径約21cmである。口縁部は外反している。外面はヘラ状のもので縦位に整形している。その後くびれ部分を刷毛状のもので横位に整形している。色調は外面は淡褐色で，内面は灰色を呈している。胎土，焼成とも普通である。外面にススが付着している。１０２はほぼ完形に近い形で出土したが，胴部と口縁部の一部が欠損していた。図上復元すると，口縁部の径が約26cm，胴部の最大径が25cm，脚部の径が約７cmで，器高は約29cmである。口縁部は外反しており，口唇部に内と外からの整形によるとみられるわずかな凹みが一部みられる。外面は刷毛による縦位の整形で内面は刷毛による横位の整形痕がみられる。色調は外面は灰褐色で，内面は褐色を呈している。胎土は砂を含む。焼成は良好である。１０３は復元口径約２６.５cmで，口縁部はわずかに外反している。最大径は胴部にある。内面は刷毛による横位の整形で，外面はくびれ部より上は刷毛による横位の整形で，下は縦に整形している。色調は内外面ともに濃灰色を呈している。胎土はややあらく，焼成は良好である。内外面ともにススが付着している。１０４も１０３同様最大径が胴部にある。復元口径約26cmである。内外面ともに刷毛による横位の調整根がみられる。外面は赤褐色で，内面は褐色を呈している。胎土は砂を含んでおりややあらい。焼成は良好である。内外面ともススの付着がみられる。１０５はくびれ部より上の部分である。復元口径約２２.５cmである。内外面ともに刷毛による横位の整形痕がみられる。色調は内外面ともに明黄褐色を呈している。胎土はややあらく，砂を含む。焼成は良好である。

１０６～１１２はⅧ層出土の甕形土器の底部である。１０６は灰白色を呈しており，外面は刷毛による横位の整形痕がみられる。胎土はややあらく，焼成は良好である。１０７，１０８は赤褐色を呈しており，胎土，焼成ともに普通である。１０９は外面はヘラによる横位の整形痕がみられる。色調は灰褐色を呈しており，胎土，焼成とも普通である。１１０は外面は横位の刷毛による整形痕がみられる。色調は内外面とも赤褐色である。胎土はややあらく，焼成は良好である。１１１は内外面とも刷毛でていねいに仕上げられている。外面は主として横方向であるが，一部縦位の整形痕もみられる。１１２はヘラでていねいに仕上げられている。色調は黄褐色で胎土はややあらく，焼成は良好である。

壷形土器（第15図１１３～第16図１２７）

１１３は頸部に一条の突帯をはりつけている。内外面ともヘラによる横位の整形痕がみられ，ていねいに仕上げられている。色調は明茶褐色を呈している。胎土はややあらく，焼成は良好である。１１４は幅広の突帯の部分である。先の鋭いヘラ状のもので菱形を形成するように斜線をひいている。１１５も１１４同様幅広の突帯のつく胴部である。突帯の部分は刷毛状のもので整形されており，その上に３条あるいは４条のヘラ書き沈線文と半截竹管文を組み合わせ

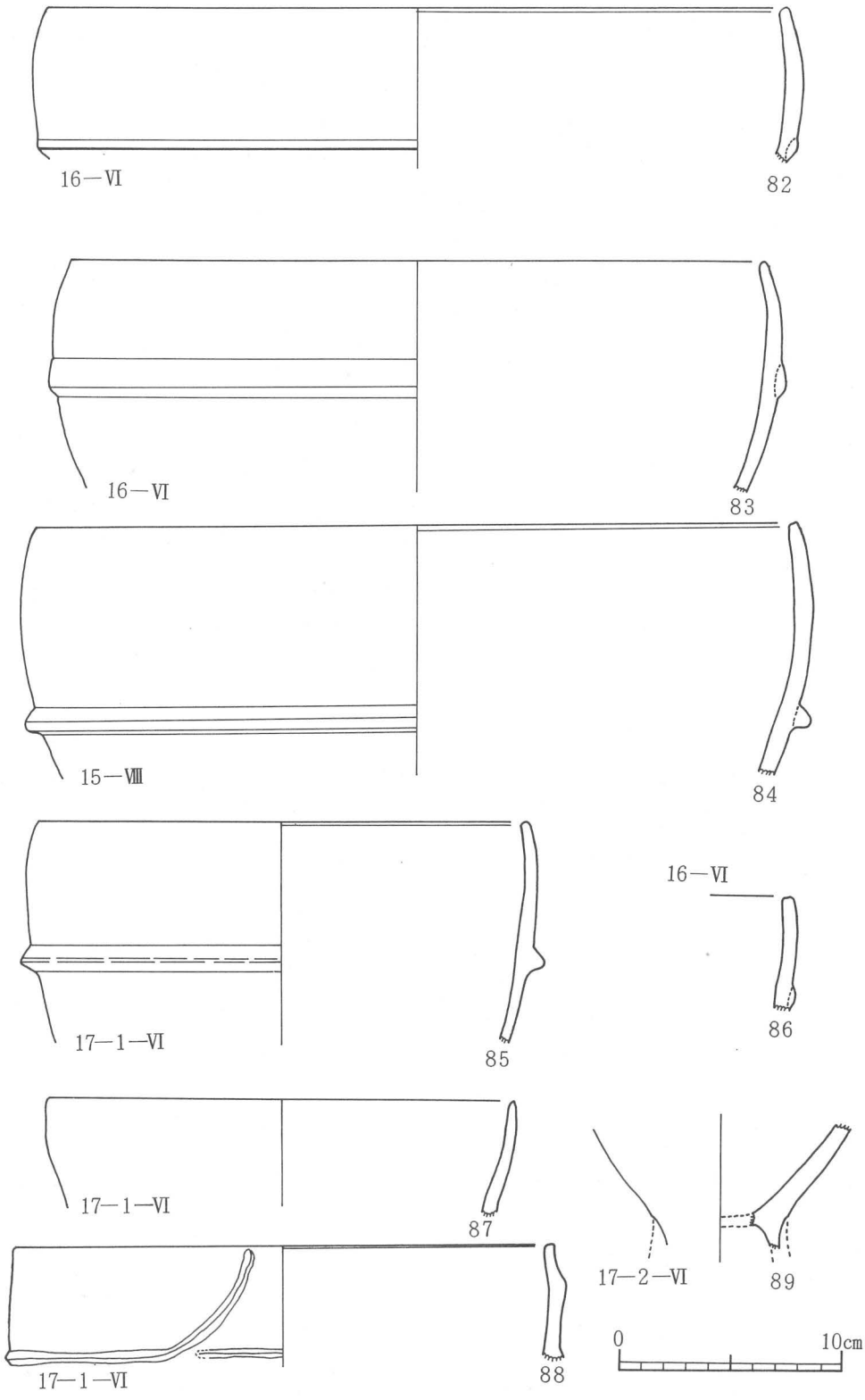
ている。突帯より下部はヘラでていねいに整形されている。胎土は３～４㎜大の小石を含み，焼成は普通である。色調は淡赤褐色を呈している。**１１６**は２条の突帯をはりつけている。これはまず上の突帯を指でつまんで押しつけ，次に下の突帯を同じようにしてつけたものとみられる。整形は縦位の刷毛によるものである。色調は外面は淡茶褐色で，内面は灰褐色を呈している。胎土はややあらく，焼成は良好である。**１１７**は復元口径約１２.５㎝である。頸部に刻目突帯をつけている。色調は内外面とも赤褐色である。胎土は砂を含み，焼成は良好である。**１１８**は内外面とも赤褐色を呈しており，胎土はややあらく，焼成は普通である。**１１９**は復元口径約16㎝である。内外面とも刷毛による横位の整形痕がみられる。色調は内外面とも黄褐色である。胎土，焼成とも良好である。**１２０**は内外とも刷毛による横位の整形である。色調は内外とも淡茶褐色を呈し，胎土，焼成とも普通である。**１２１**は内外面とも刷毛による横位の整形痕がみられる。色調は内外面とも黄褐色を呈している。胎土，焼成とも良好である。**１２２**は内外面とも横位の刷毛による整形である。色調は外面は赤褐色で内面は黄褐色である。胎土はややあらく，焼成は良好である。**１２３**は幅広の突帯の部分である。刷毛による横位の整形の後の，ヘラ状のもので斜めに引いた沈線を組み合せた文様である。突帯の部分で復元径は約24㎝である。胴部のほぼ中央付近に２条の刻目突帯をもつ。外面の整形は刷毛によるもので主として斜方向である。内面は主として横位の刷毛による整形痕がみられる。色調は内外面とも褐色である。胎土は普通で良成は良い。**１２５，１２６**は壷の底部である。両方とも一部欠損しているが乳房状と想像される。**１２５**は内外面とも褐色を呈している。胎土，焼成とも良好である。**１２６**は内外面とも黄褐色を呈している。胎土はわずかに砂を含む，焼成は良い。**１２７**は復元口径約１０.５㎝胴部最大径１５㎝である。外面は褐色で内面は黄褐色である。胎土はややあらく焼成はややもろい。

坩形土器（第16図１２８～１３３）

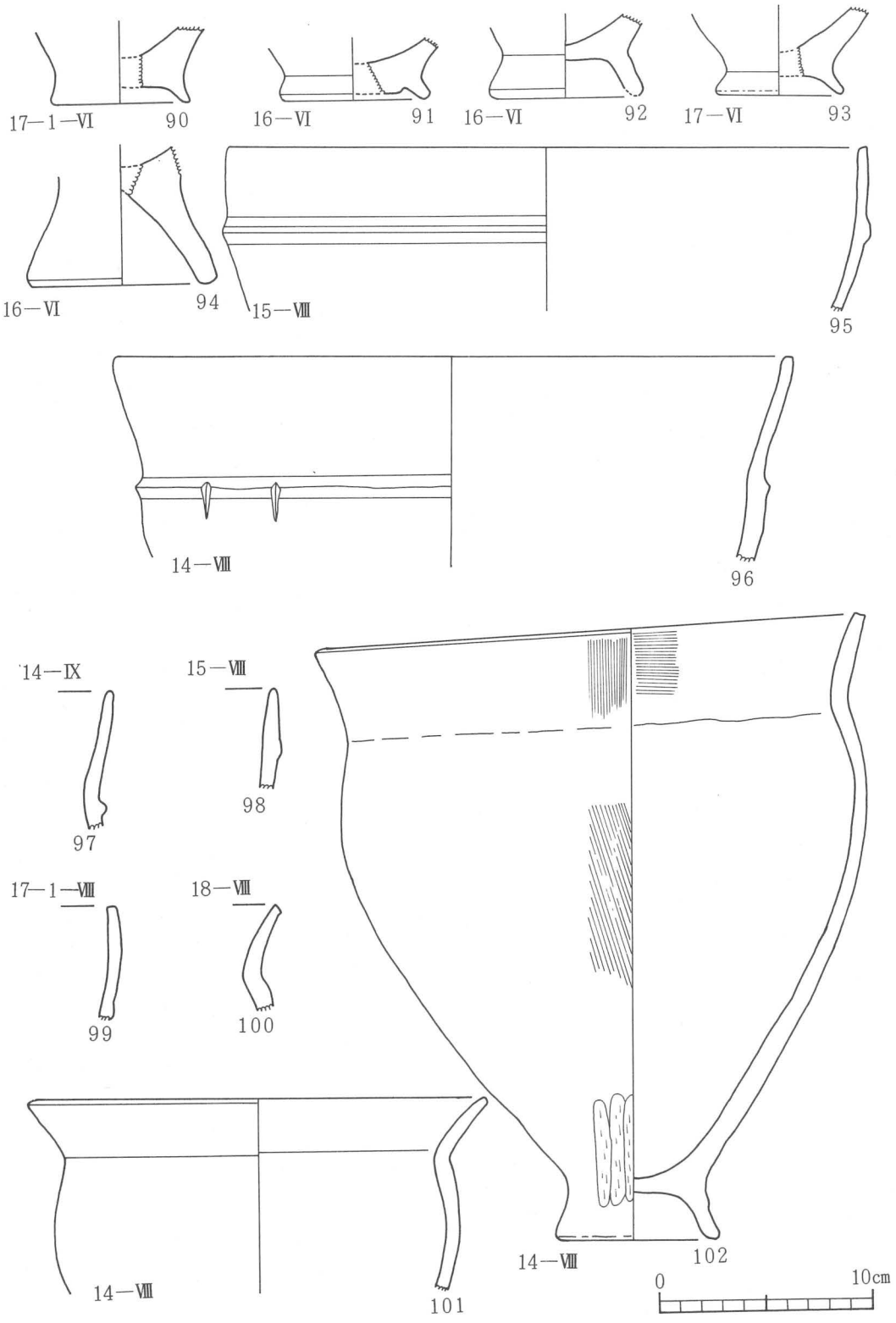
１２８は平底の底部を有し，胴部は丸みをおびており稜線はもたない。内外面とも灰褐色を呈している。胎土はややあらく，焼成は良好である。**１２９**は平底に近い丸底である。色調は内外面とも灰褐色を呈している。胎土はややあらく，焼成は良好である。**１３０**は丸底で胴部も丸みをおびている。口縁部との接合部分に内外とも稜をもつ。色調は外面は赤褐色あるいは褐色を呈しており，内面は赤褐色である。胎土はややあらく，焼成もややもろい。**１３１**は丸底で胴部も丸みをおびており，内側に稜線をもつ。口縁部との接合部分も内外とも稜線をもつ。色調は内外とも黄褐色を呈している。胎土はややあらく，焼成は普通である。**１３２**は平底で胴部も内外面とも稜線をもつ。色調は内外面とも明黄褐色である。胎土はややあらく，焼成は普通である。**１３３**は内外とも稜線をもつ胴部の破片である。外面には丹が付着している。内面は灰色を呈している。胎土には精製された粘土が用いられており，焼成も良好である。

高坏（第17図１３４～１４３）

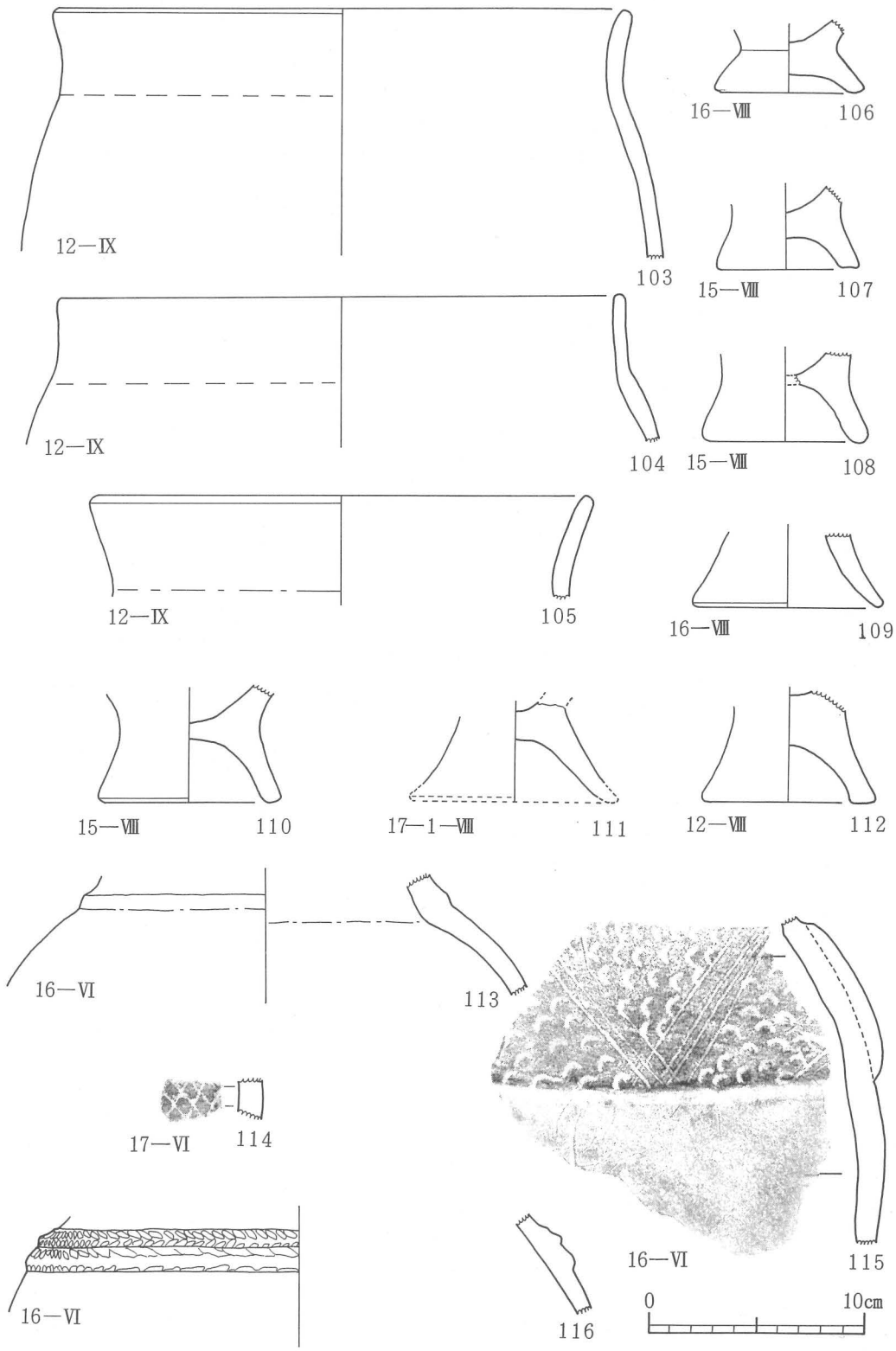
１３４，１３５，１３８は外側にわずかな段をもつ坏部の破片である。胎土には精製された粘土を用いており焼成もよい。整形は内外面とも横位の刷毛ナデによるものである。**１３４**は



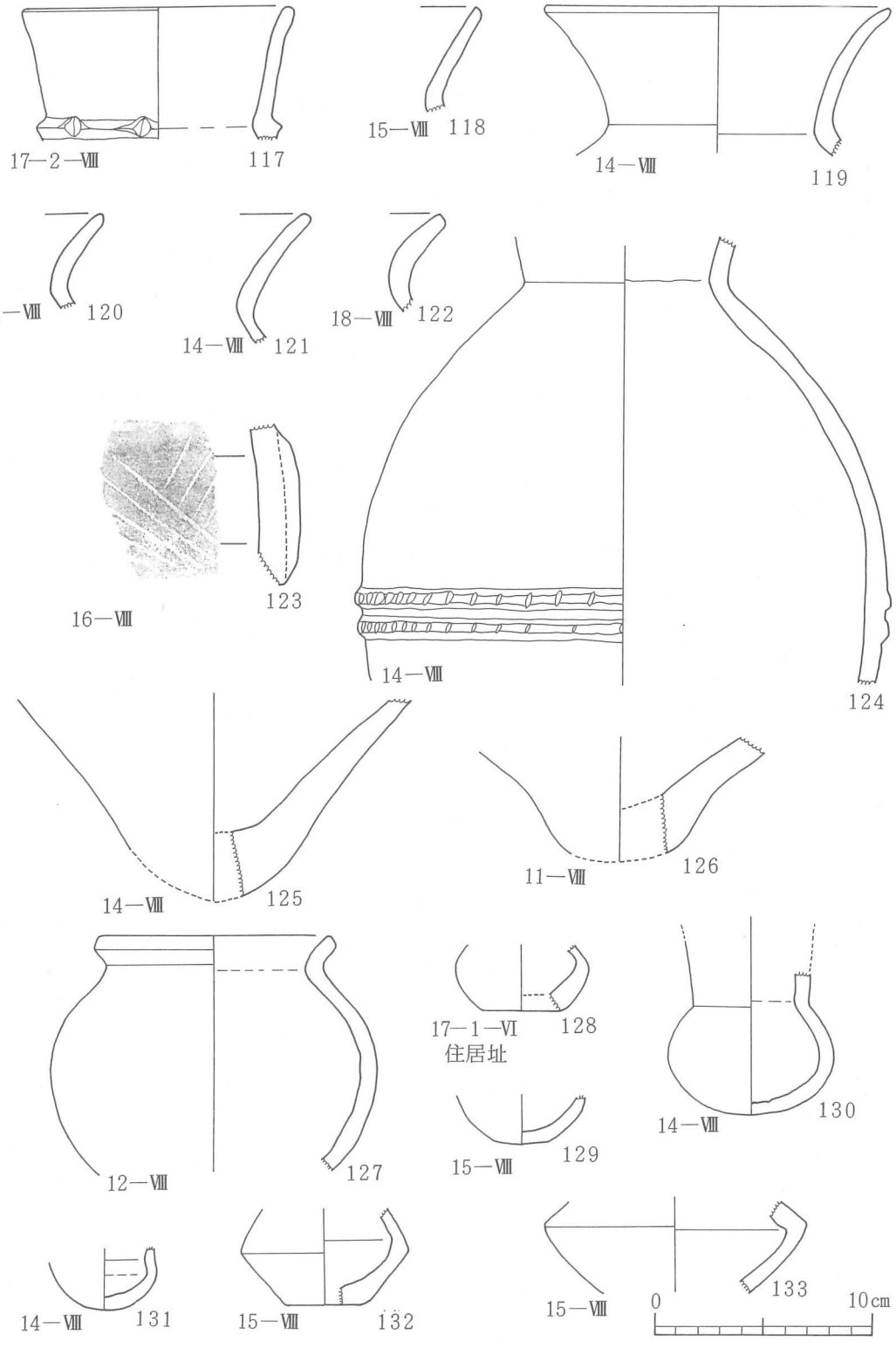
第13図　古墳・奈良時代の遺物(1)



第14図　古墳・奈良時代の遺物(2)



第15図　古墳・奈良時代の遺物(3)

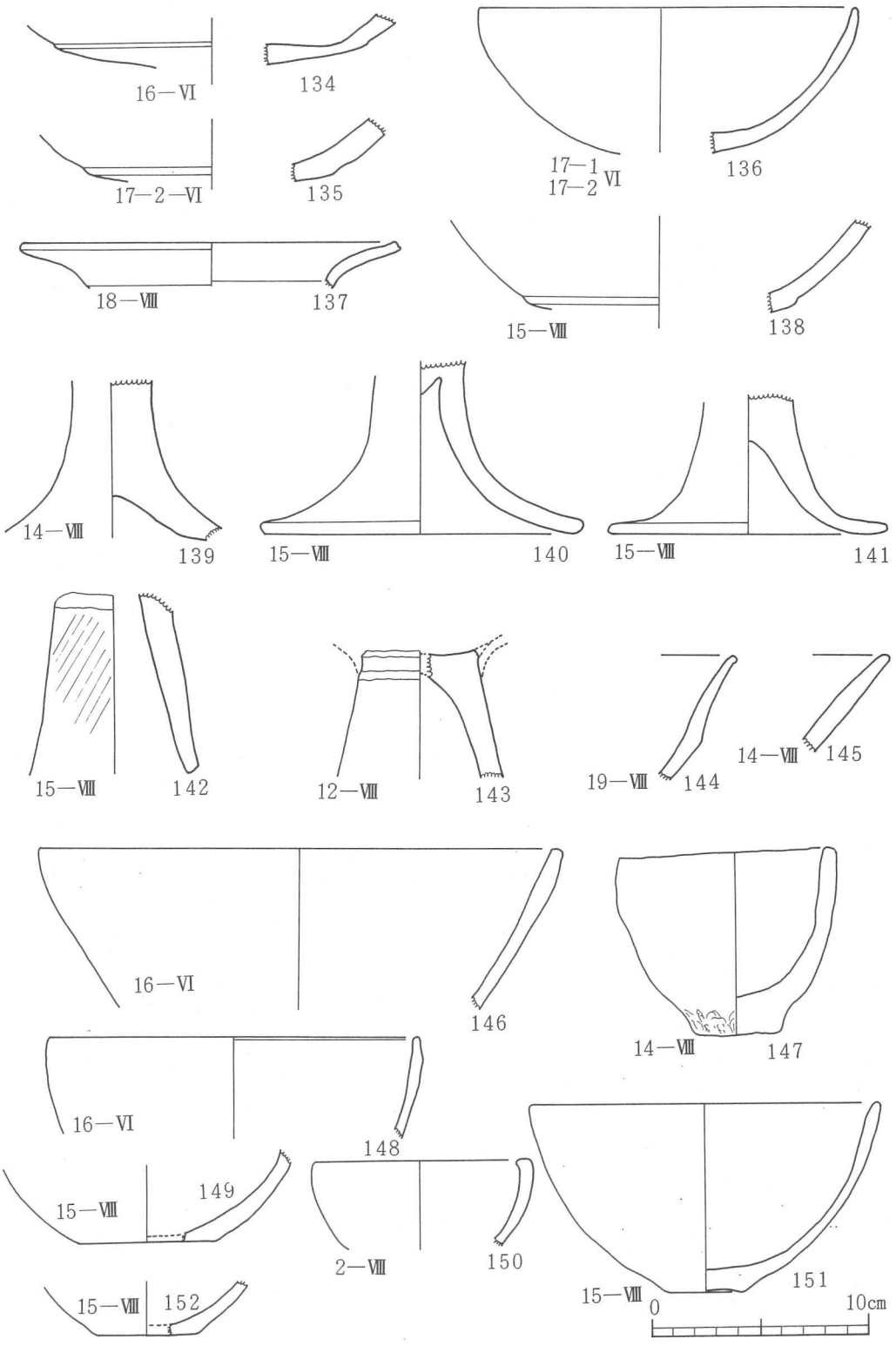


第16図　古墳・奈良時代の遺物(4)

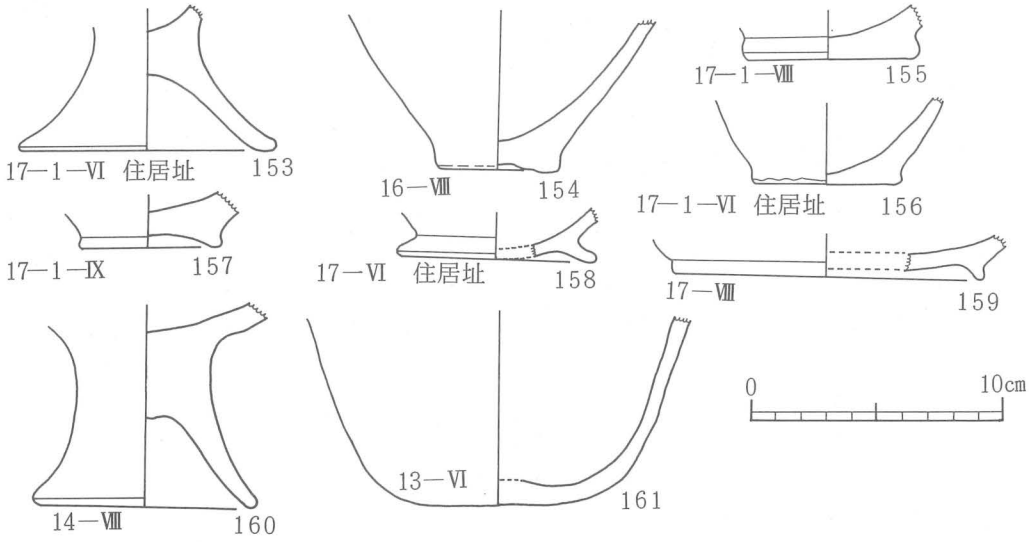
内外面とも，１３８は外面のみ丹が塗られている。１３５は内面は赤褐色，外面は褐色を呈している。１３８の内面は黄褐色である。１３６は復元口径約１７.５㎝をはかる椀形の坏部破片である。外面は刷毛による横位の整形である。内面の色調は黒褐色で，外面は灰褐色を呈している。胎土はややあらく，焼成は普通である。１３７は口縁部の破片で内外面ともに刷毛による横位の整形痕がみられる。内外面とも横褐色を呈しており，胎土，焼成とも普通である。１３９～１４３は脚部である。１３９～１４１は裾部が大きく開きながら端部に至るものである。１３９，１４０はヘラでていねいに整形されており丹が塗られている。胎土は精製されたものを使用しており，１４０にわずかに砂が混っている。１４１は明茶褐色を呈しており，胎土はややあらく，焼成は良い。１４２は脚部の筒形の部分であり，赤褐色を呈している。胎土はややあらく，焼成は良い。これは何らかの形で二次的に使用されたらしく，上半部に火をうけたと思われる部分が顕著にみられる。１４３は坏部との接合部分で坏部のはずれた痕跡がみられる。色調は赤褐色を呈し，胎土はややあらく，焼成は良い。

鉢形土器（第17図１４４～第18図１６１）

１４４は口縁部破片である。内面にヘラによる横位の整形痕がみられる。色調は内外面ともに灰褐色を呈している。胎土焼成ともに良好である。１４５は内外面ともに刷毛による横位の整形である。外面は赤褐色で内面は灰褐色を呈している。胎土はややあらく，焼成は良好である。１４６は復元口径24㎝である。内外面ともにヘラによる横位の整形痕が認められる。色調は内外面とも淡茶褐色である。胎土はややあらく，焼成は良好である。１４７はほぼ完形に近いもので口縁部径約10㎝，底部径約４㎝，高さ約８㎝を計る。内外面とも刷毛による横位の整形痕がみられるが，外面の整形はややあらい。底部には指によると思われる整形痕がみられる。色調は内外面とも灰褐色を呈しており，胎土はややあらく，焼成は良好である。１４８は内外面ともにていねいな横位のヘラナデ整形がなされている。色調は内外面とも褐色を呈しており，胎土はややあらく，焼成は良好である。１４９は復元径が約６㎝の平底の破片である。内外面ともに刷毛でていねいに整形がなされている。外面には丹と思われるものが付着している。内面は橙褐色を呈している。胎土，焼成ともに良好である。１５０は内外面ともヘラによると思われる整形痕がみられるが，ややあらい。色調は内外面とも暗赤褐色を呈している。胎土，焼成ともに良好である。１５１は復元口径約16㎝，底部径約3.５㎝，器高は約８.５㎝を計る。底部はわずかな上げ底である。内外面ともに刷毛でていねいに整形がなされている。色調は内外面ともに赤褐色，もしくは灰褐色である。胎土はややあらく，焼成は良好である。１５２は復元の底部径が約４.５㎝である。内外面ともにていねいなヘラナデの整形である。色調は内面は灰褐色，外面は明黄褐色である。胎土，焼成ともに良好である。１５３は鉢の脚部である。外面の上半部はヘラによる縦位の整形痕がみられる。内面はヘラによる横位の整形である。色調は内外面とも濃灰色である。胎土はややあらく，焼成は良好である。１５４はわずかな上げ底になる。内面は横位のヘラ整形である。外面は縦位のヘラ整形の跡がみられる。色調は内外面とも赤褐色である。
胎土，焼成とも良い。１５５は内面はヘラによる整形である。色調は内外面とも灰色で，胎土は



第17図　古墳・奈良時代の遺物(5)



第18図　古墳・奈良時代の遺物(6)

ややあらく，焼成は普通である。**156**は内面は赤褐色，外面は明褐色，胎土は砂を多く含みややあらく，焼成は普通である。**157**はあげ底で内外面ともヘラによる整形である。色調は内面は黄褐色で，外面は刷毛による整形である。色調は内外面とも黄褐色で胎土焼成ともに良好である。**158**は内外面ともヘラによる整形である。色調は内面は黄褐色で，外面は灰褐色である。胎土はややあらく，焼成は良好である。**159**は内面はヘラによる整形で，外面は刷毛による整形である。色調は内外面とも黄褐色で，胎土，焼成ともに良好である。**160**は脚の部分で，内外面ともに褐色を呈している。胎土は砂を多量に含み，ややあらく焼成は普通である。**161**は内面は刷毛による縦位の整形痕がみられ，外面はヘラによる縦位の整形痕がみられる。色調は内面は灰色，外面は褐色である。胎土はややあらく，焼成は良好である。

2　鉄鏃

鉄器の出土は第19図に図示した鉄鏃1点のみである。10－1トレンチの第VIa層から出土しており，成川式土器を共伴している。全長8.7cm，身の最大幅2.1cm，茎の幅は中央部で0.9cm，身の厚さ0.4cm，茎の厚さ0.5cmである。逆刺はなく，身の形は略菱形をした菱形式の一種である。

第19図　鉄　鏃

3　土師器（第20図１６２～１６５）

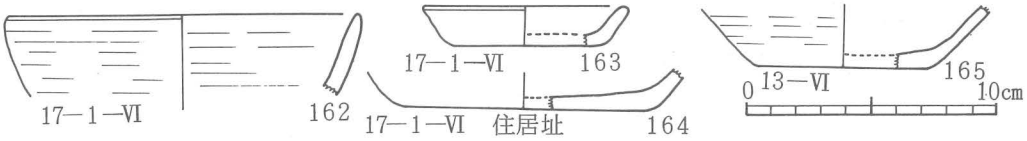
１６２は厚手の坏で内面に研磨が若干みられる。１６３は皿形の土器と思われる。１６４は内面にロクロ調整痕がみられる坏である。１６５は灰褐色を呈した坏でロクロの調整痕がみられる。これらはⅥ層に出土している。

4. 須恵器（第21図１６６～第22図１８２）

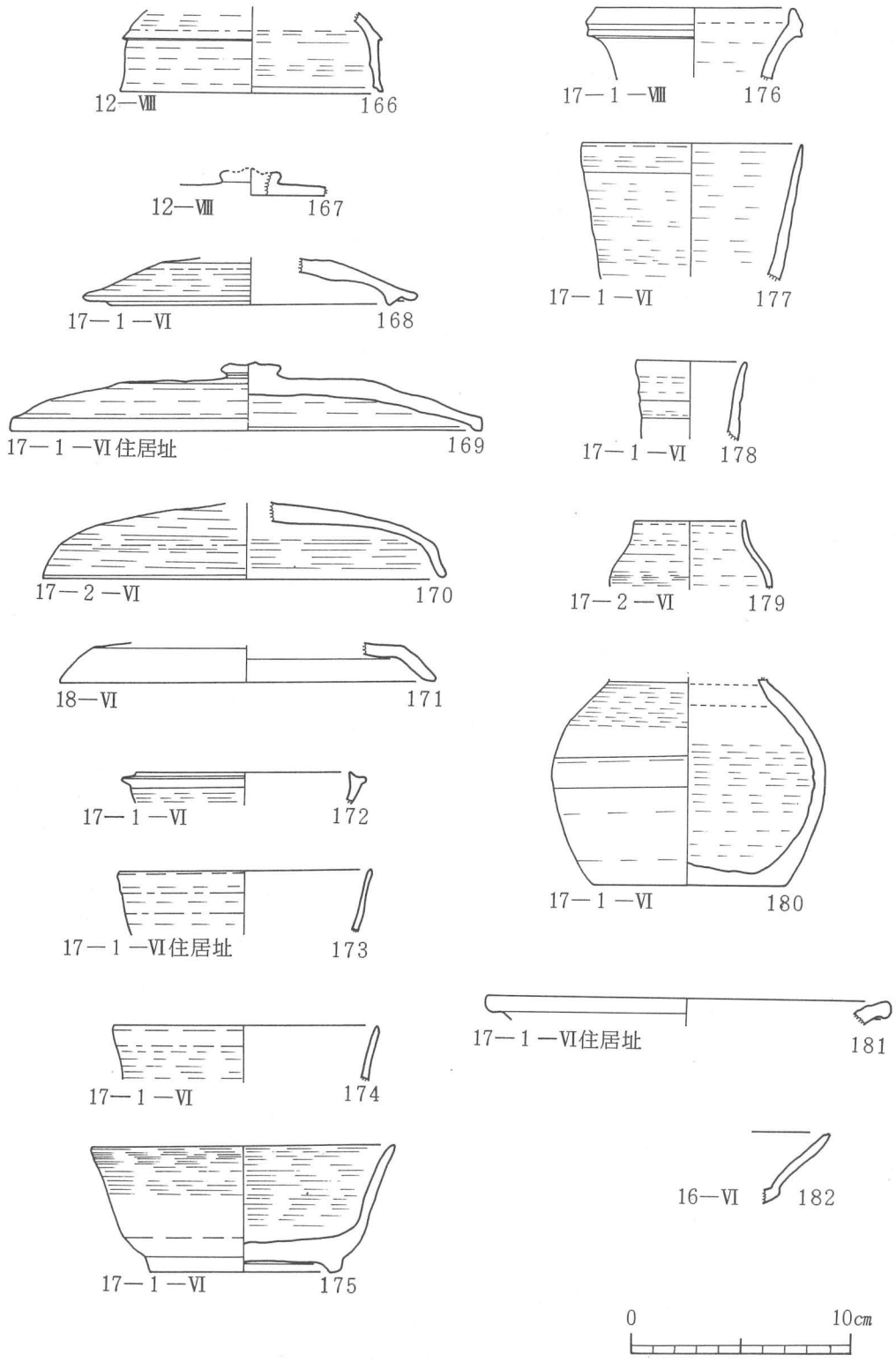
１６６～１７１は蓋である。１６６はⅧ層より出土したもので胎土も良く，５世紀頃の坏蓋と思われる。１６８はかえりの短いもので７世紀前半と思われる。１６９はつまみの頂部が若干尖る蓋であり，１７０，１７１ともに８世紀中頃のものと思われる。１７２～１７５は坏身である。１７２は６世紀末の坏身で，１７３，１７４，１７５は８世紀中頃のものと考えられる。１７５は角張った高台をもち胎土や調整が良い。１７６は小甕の口縁部と思われる。６世紀末にあたると考えられる。１７７は長頸壷の口縁部と思われる。１７８は平瓶に近いものと思われ６世紀末に比定されると考えられる。１７９，１８０は坩で１７９の方はうす手で調整が非常に良い。８世紀中頃と思われる。１８１は甕の口縁部であり時期不明，１８２は口縁部で壷に近いものと考えられる。１８３～１９３は甕形土器の一部である。１８３～１８５はⅧ層中より出土し，１８６～１９３はⅥ層中より出土している。１８７は肩部であり，タタキの後，再度刷毛調整を行っている。なお１９３は底部と思われる。17－１トレンチに検出された住居址は８世紀中頃の須恵器が出土し，まわりにも同期の須恵器が出土している。

（４）中世末から近世初期の遺物（第23図１９４～２００）

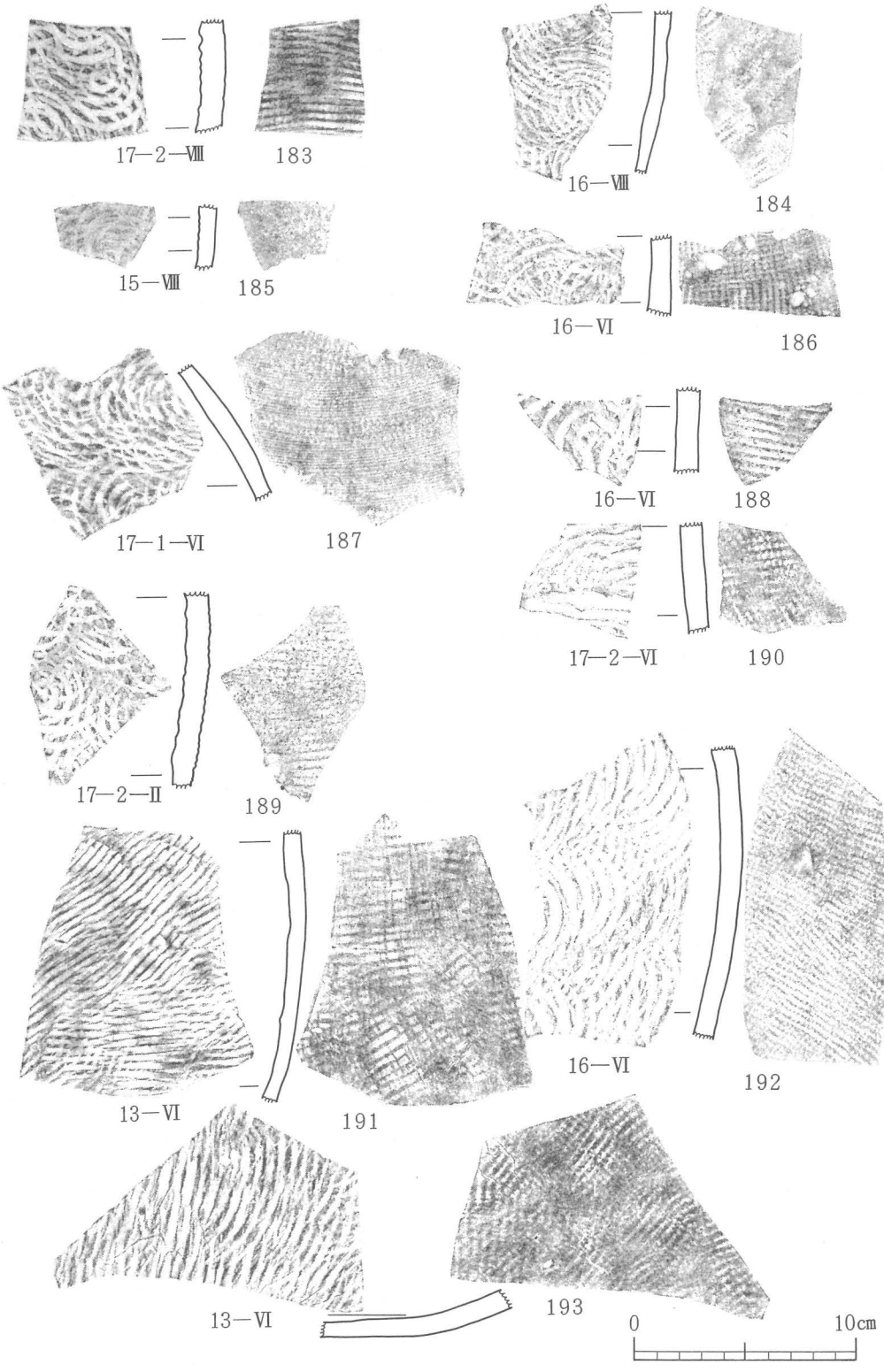
１９４は瓦器質の火鉢と思われる。頸部には菊花文を梅花状に施した文様と，菊花文と蕨手文を梅花状に施した文様の交互文様帯があり，肩部の突帯には斜条文と鳥足状の文様を交互に施している。内側は刷毛目調整である。１９５は擂鉢である。外面は箆けずり調整を行い内面は７条の櫛目を施している。色調は褐色で焼成は良い。１９６は備前焼の擂鉢である。色調は暗赤褐色であり，胎土，焼成は良い。口縁部は２条の沈線がはいり，内側は見込みまで櫛目文がみられる。櫛目文は11本が１セットになっており，交わらせている。平底である。新しい時期の備前擂鉢と思われる。１９７は鉢で外面は釉がかかっておらず，ロクロ調整痕がみられる。内面は白，茶，灰，緑の釉がまわっている。１９８は見込みに重焼の痕があり青磁釉がかかっている。外面は灰釉が高台までかかっている。器形は鉢と思われる。１９９は青磁片である。暗緑褐色をしたもので龍泉窯系と思われる。２００は染め付けである。見込みには呉須で草花文が描かれている。



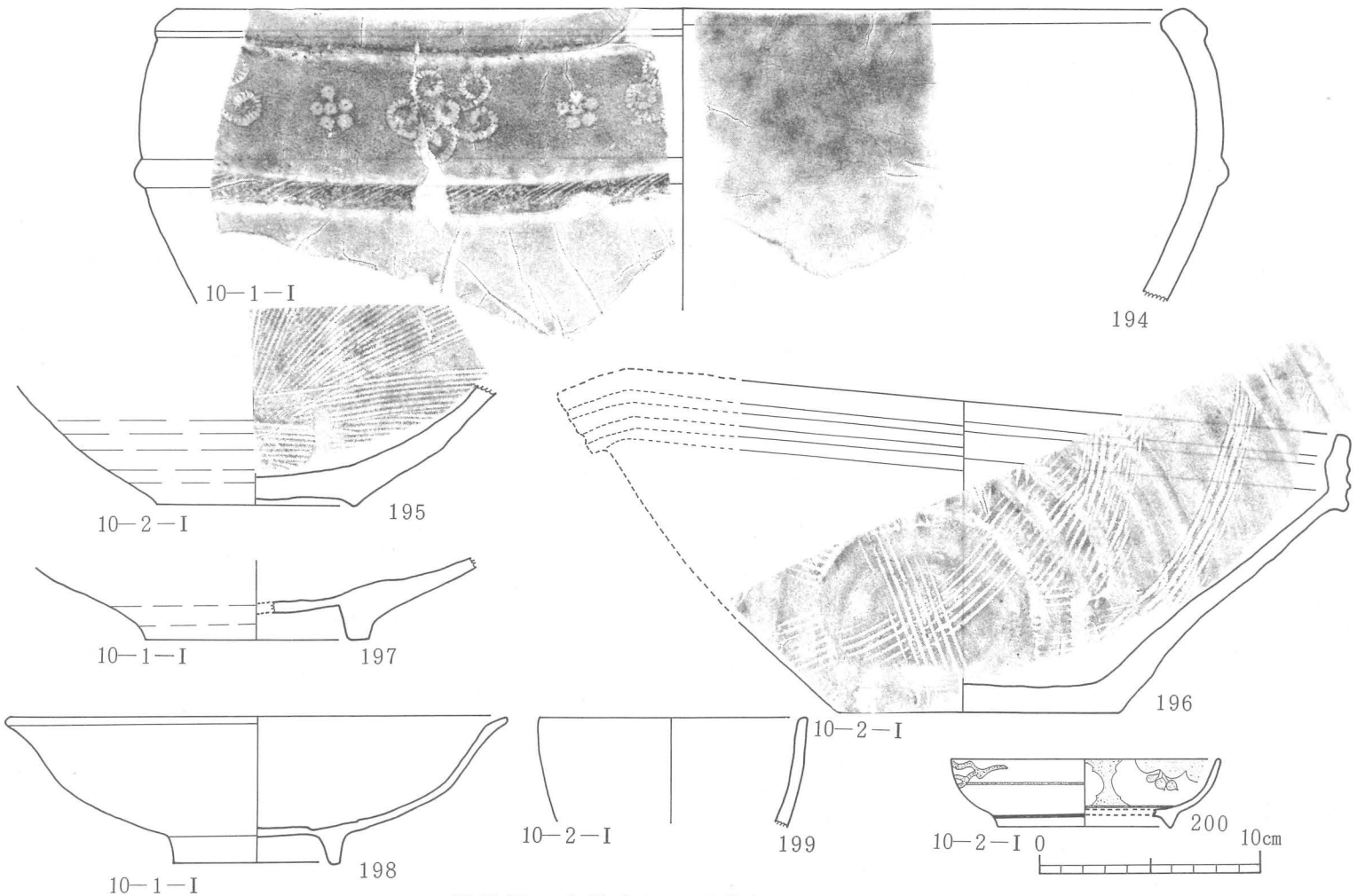
第20図　古墳・奈良時代の遺物(7)



第21図　古墳・奈良時代の遺物(8)



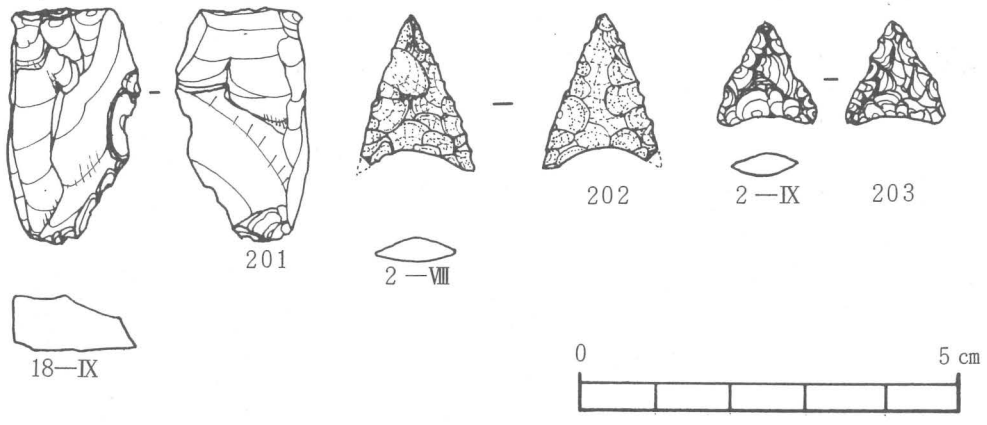
第22図　古墳・奈良時代の遺物(9)



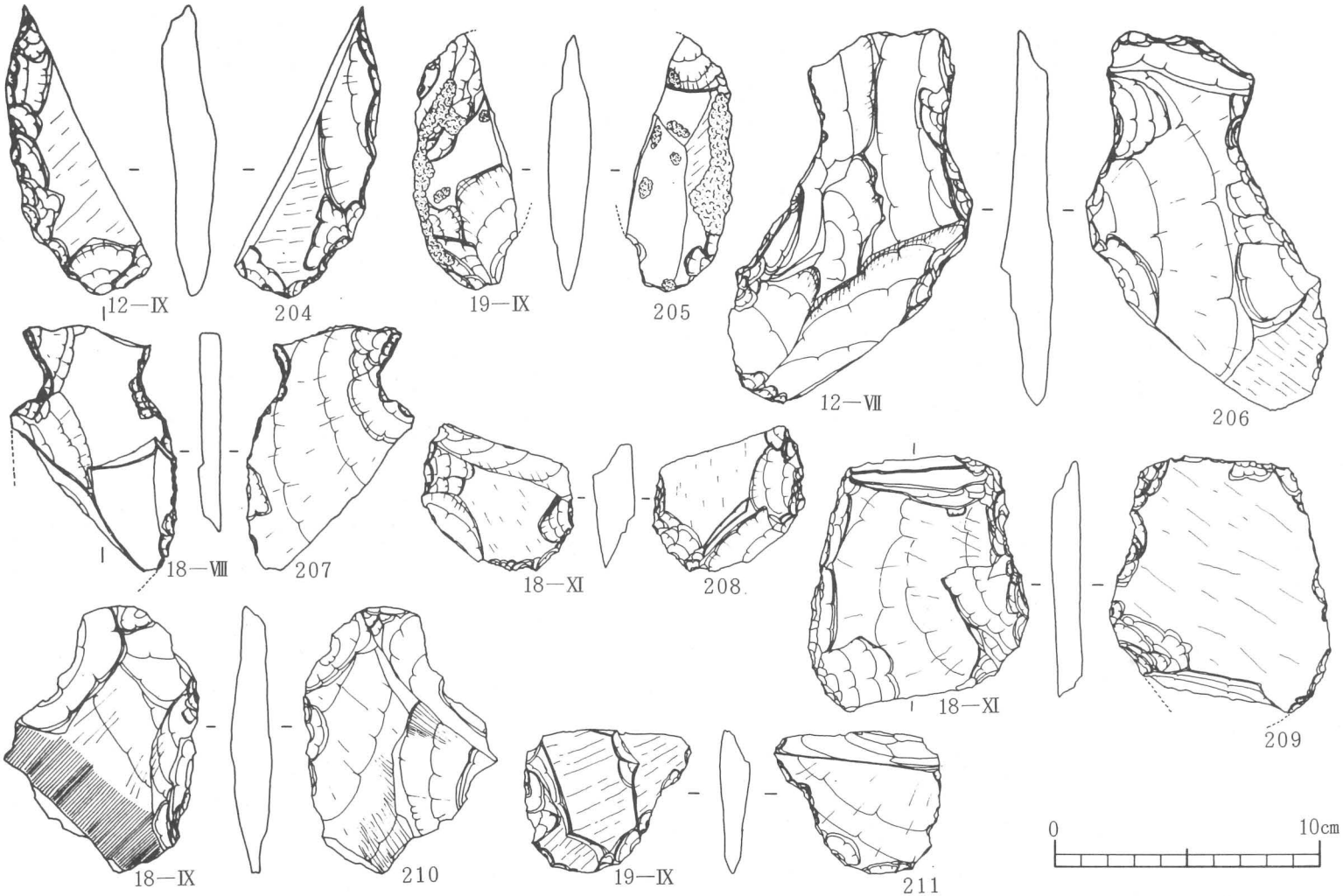
第23図　中世末から近世初期の遺物

（５）石器（第24，25，26図）

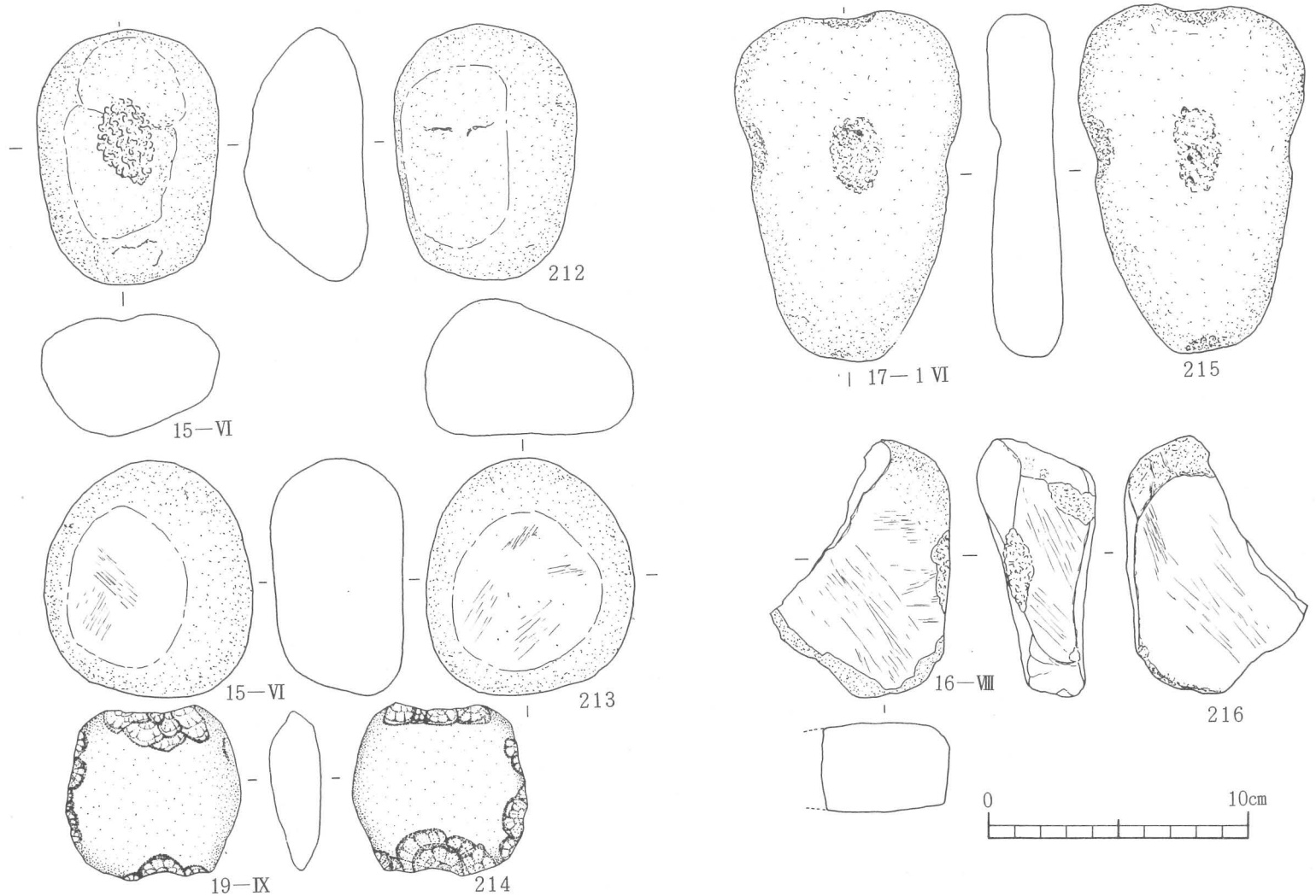
２０１は玉髄を素材とした縦剥ぎの剥片を用いたスクレイパーである。上端部にはこの素材の剥離前の石核の打面調整と思われる剥離がみられる。長径3.1㎝，短径1.8㎝，厚さ0.7㎝，重さ2.6ｇである。**２０２**は安山岩を素材とした石鏃である。長径1.8㎝，短径1.5㎝，厚さ0.2㎝，重さ0.7ｇである。**２０３**は黒曜石を素材とした石鏃である。長径1.3㎝，短径1.4㎝，厚さ0.3㎝，重さ0.6ｇである。**２０４～２１１**は打製石斧である。**２０４**は玄武岩を素材としている。現存長１０.7㎝，幅3.9㎝，重さ６６.3ｇである。鉄分が付着している。**２０６**は素材は玄武岩である。現存長9.8㎝，幅3.8㎝，重さ５６ｇである。鉄分が付着している。**２０６**は玄武岩の横剥ぎの剥片を素材としている。片面に節理面がみられる。えぐりをもち，この部分は入念な調整がなされている。現存長１４.3㎝，幅9.2㎝，重さ８４.８ｇである。**２０７**は玄武岩の横剥ぎの剥片を素材としている。刃部を欠損している。現存長9.4㎝，幅8.8㎝，重さ54ｇである。**２０８**の石材は玄武岩である。現存長4.4㎝，幅5.8㎝，重さ49.2ｇである。**２０９**は玄武岩の横剥ぎの剥片を素材としている。刃部を欠損している。両側辺は入念に調整されている。現存長9.4㎝，幅8.3㎝，重さ１２４ｇである。**２１０**は玄武岩を素材としている。刃部，基部とも欠損している。片面に一部研磨痕がみられる。現存長１０.1㎝，幅7.2㎝，重さ93ｇである。**２１１**は玄武岩を素材としている。現存長5.4㎝，幅6.2㎝，重さ３４.３ｇである。**２１２**は凹石である。安山岩を素材としている。長径9.8㎝，短径7.0㎝厚さ4.6㎝，重さ４７２ｇである。**２１３**は安山岩を素材とした磨石である。両面とも研磨されている。長径9.2㎝，短径8.1㎝，厚さ4.9㎝，重さ６００.５ｇである。**２１４**は安山岩を素材とした石錘である。長径6.8㎝，短径6.2㎝，厚さ2.0㎝，重さ１４８.８ｇである。**２１５**は安山岩を素材としている凹石である。両面とも凹があるが片面はやや浅い。４辺とも敲打痕がみられるが３ケ所は凹んでいる。長径１３.3㎝，短径8.7㎝，厚さ2.6㎝，重さ515ｇである。**２１６**は砂岩を素材とした砥石である。表裏両面と１側辺に使用の痕跡がみられる。一部欠損している。現存長１０.1㎝，幅6.8㎝，中央部の厚さ3.4㎝である。



第２４図　石器（１）


12—IX
204
19—IX
205
12—VII
206
18—VIII
207
18—XI
208
18—XI
209
18—IX
210
19—IX
211
0
10cm

第25図　石　器　(2)



第26図　石　器　(3)

第Ⅲ章　まとめ

４２.１haの調査予定地域内に50mグリッドを組み，当初約19地点のグリッドを配して試掘調査を行った。４×４mのトレンチを基本として進めたが火山灰が深く，また遺物の出土状態からみて，１トレンチは４×７mに，10と17トレンチは２点に試掘を行った。出土層の深さは各地点とも差異がみられるが，最深地点は４mをこえるものもあった。この地域の標準層としては第３図のごとくⅠ層からXIV層までみとめられた。全体的に開聞岳の噴火灰であるが間々で静穏期がみられ，その期に生活した痕跡がみられる。

第Ⅰ層は現代の生活層であり，20cm前後が普通である。Ⅱ層は礫混り黒色火山灰層で上面には中世末ならびに近世初期の遺物が10－１トレンチで出土している。このトレンチでは階段状のグリ石があり，備前焼の擂鉢等が出土している。10トレンチ付近は中世末から近世初期にかけての遺跡と思われる。(註①)

第Ⅲ層は明紫色溶結火山灰層で仁和元年（８８５）の開聞岳に比定されよう，第Ⅳ層は噴火の静穏期とみられる。第Ⅴ層は上部が紫色溶結火山灰，下部が暗黄褐色スコリア火山灰礫層であり，貞観16年（８７４）の噴出と思われる。(註②)第Ⅳ層，第Ⅴ層も無遺物層であるがⅤ層に於いては木葉，草葉等の化石もみられる。(註③)第Ⅵ層は暗褐色砂礫混入粘質土層が主で部分的に下層に灰色砂層がみられる。Ⅵａ層はしっかりしているが，Ⅵｂ層は２次堆積層と考えられる。Ⅵ層では南九州でいう成川式土器と７世紀初頭と８世紀後半ないし末の須恵器と土師器が出土している。この成川式土器は口縁部が内曲する甕形土器や幅広突帯をもつ甕形土器である。(註④)第Ⅶ層は上部のａが暗青灰色溶結火山灰層とｂの暗青褐色スコリア火山礫層の２つからなっている。この層は無遺物層である。第Ⅷ層は暗褐色小礫腐植土層，第Ⅸ層はａが赤褐色小礫混入土，ｂが褐色土，ｃが赤褐色小礫混入土層である。Ⅷ，Ⅸａには成川式土器，この土器は甕形土器に於いては口縁部が外反し，壺に於いては細形の突帯をもつ土器である。Ⅷ層中には５世紀の須恵器も出土している。Ⅶ層の溶結火山灰をはさんでⅥ層とⅧ層の成川式土器，須恵器の時間的差が認められたことは今回の調査で最も良い成果であった。(註⑤)またⅨａ，Ⅸｂにおいては成川式土器に一部伴い主にｂ層に於いて弥生中期末の三津永田系の甕形土器，弥生前期末から中期初頭の入来式土器が出土している。(註⑥)第Ⅹ層は暗赤褐色粘質土層である。Ⅸｃ層に於いては，晩期Ⅲ式の夜臼期が主に出土し，(註⑦)第Ⅹ層に於いては晩期Ⅱ式の礫石原期の土器が主に出土している。(註⑧)また市来式土器指宿式土器もⅩ層に出土している。(註⑨)第XI層は褐色砂礫混入粘質土層で２次の可能性がある。(註⑩)第XII層灰色溶結火山灰層で，無遺物層である。(註⑪)第XIV層は暗褐色粘質土層で凹線文土器が非常にもろい状態で出土した。昭和48年度に橋牟礼川遺物包含地を調査した時阿高系の土器が出土しているのでこの凹線文土器は参考資料として考えられよう。第XIV層は明茶褐色砂混入粘質土層で２次堆積層と思われるが，曽畑式土器が出土した。(註⑫)(註⑬)

各トレンチの遺物出土状況は，１，２トレンチでは弥生の遺物が出土したが，湧水層より出土している。３～９トレンチは２次堆積層が厚く，Ⅴ層上面で湧水がみられた。10～19トレン

チに於いてはⅥ層がしっかりしており，点々と出土している。10トレンチでは鉄鏃，13トレンチでは獣骨片ないし焼土，17トレンチでは住居址等が検出されている。10～19トレンチの第Ⅷ層においては各トレンチで成川式土器が出土しているが，三津永田系の甕形土器や入来式等が出土している。なお，14トレンチの遺物は２次堆積層中より出土している。縄文期に於いては18，19トレンチだけを縄文層まで掘ったため，他の所は未確認の状態である。

以上のように10トレンチ以南の台地，すなわち王子田，丹波川から橋牟礼川遺物包含地にかけて遺物の出土をみた。しかし第Ⅵ層の遺物量の濃淡や，第Ⅷ，Ⅸ層の２次堆積層の遺物の関係，縄文遺跡の範囲等はつかめられず，今後の調査を待ちたい。

註１　備前焼　岡山県立博物館　昭和54年10月
２　三国名勝図絵
３　同　上
４　九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅵ　福岡県教育委員会　昭和50年
５　竹並遺跡　福岡県行橋市竹並調査委員会　昭和54年
６　三津永田遺跡　日本農耕文化の生成
７　入来遺跡　鹿児島考古11号　鹿児島県考古学会　昭和51年
８　新版考古学講座３「先史文化」　晩期九州　賀川光夫　昭和44年
９　同　上
10　日本の考古学Ⅱ「縄文時代」　九州東南部　賀川光夫　昭和40年
11　同　上
12　日本の考古学Ⅱ「縄文時代」　九州西北部　乙益重隆　昭和40年
13　同　上

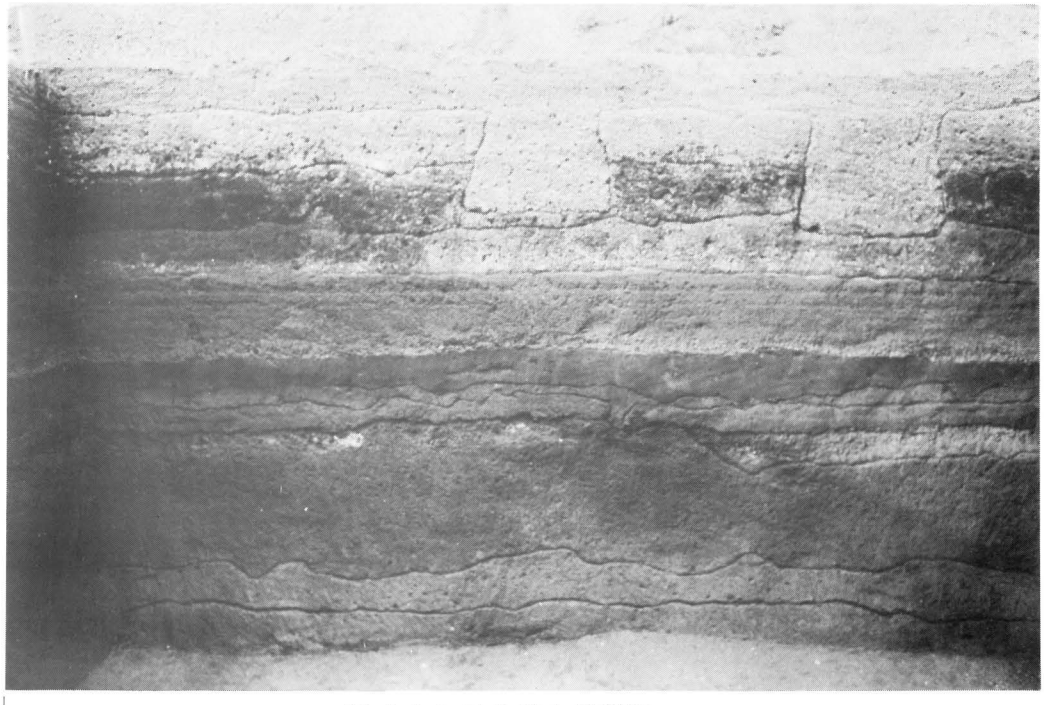
橋牟礼川遺跡

昭和55年３月
発行　指宿市教育委員会
指宿市十町２４２４
印刷　朝日印刷
鹿児島市下荒田四丁目26－13

図　　版

図版 1

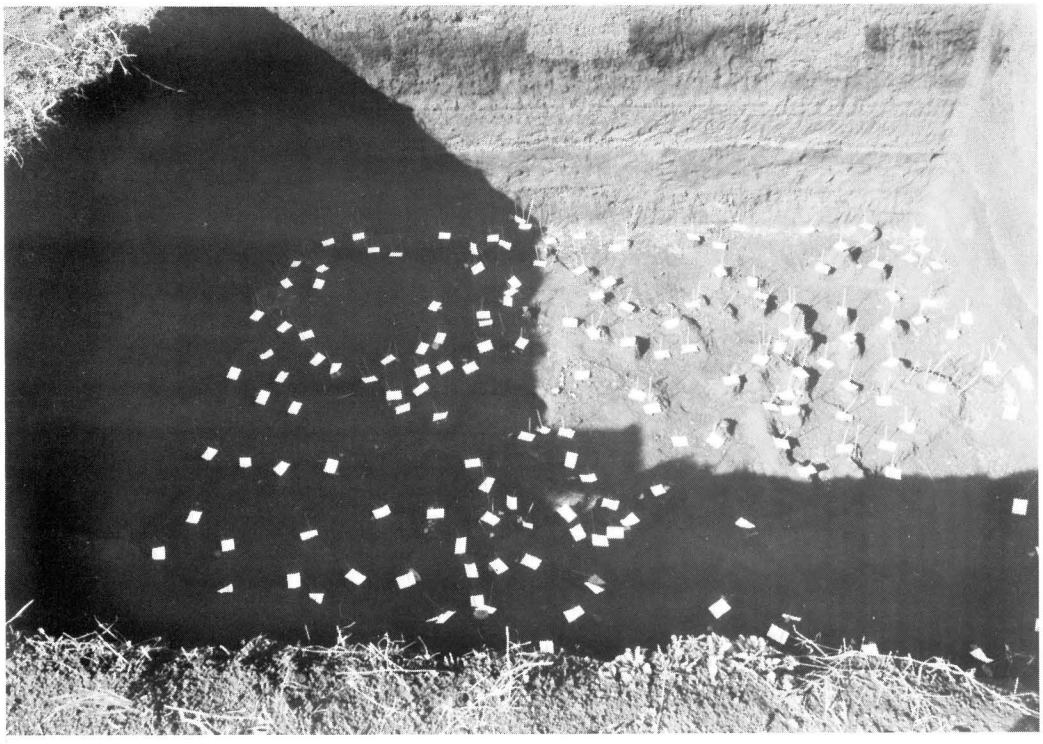
遺跡遠景（魚見岳より）



12 トレンチ北壁土層断面

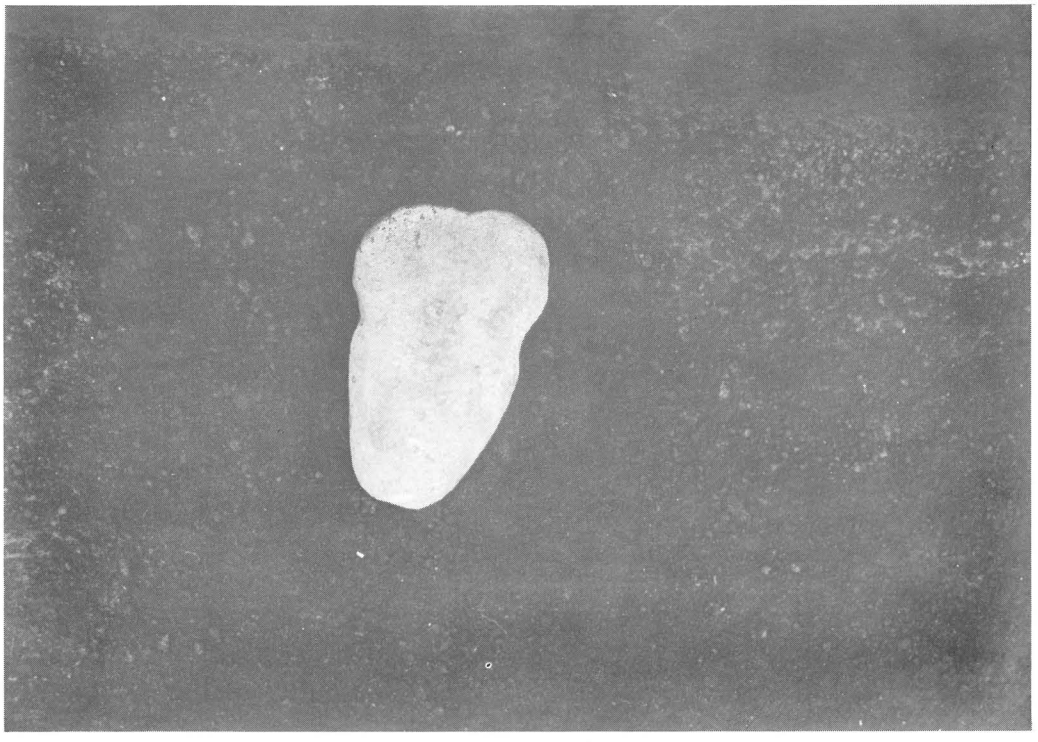
図版 2

10－1トレンチぐり石出土状況



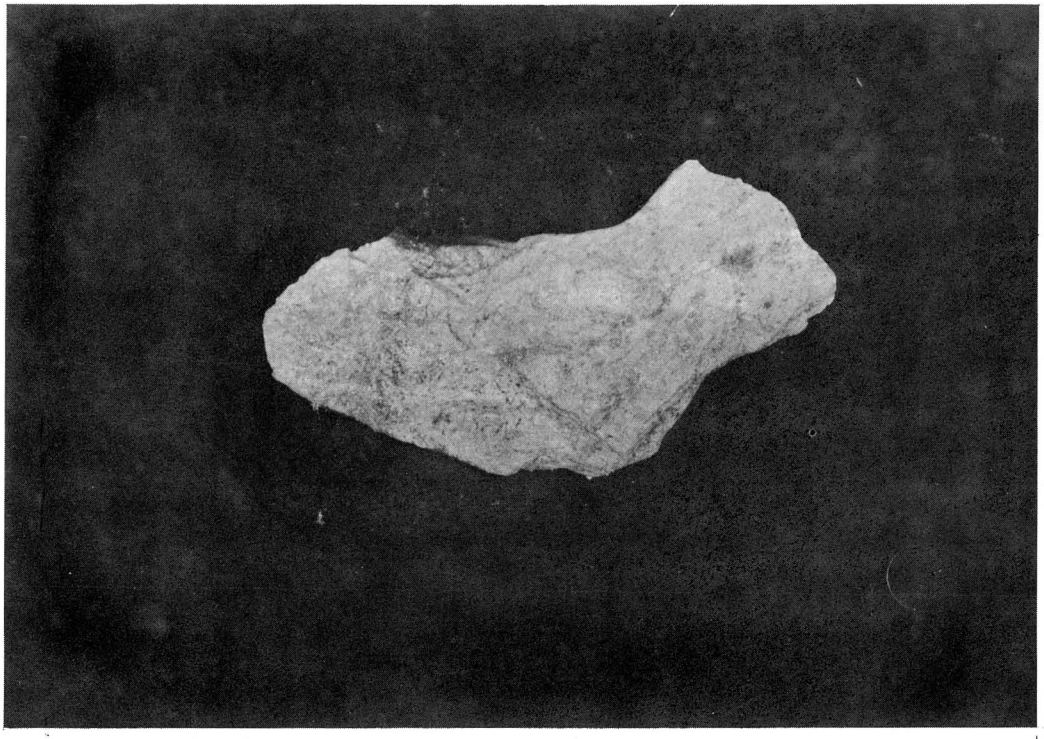
12トレンチ遺物出土状況

17－1トレンチ遺物出土状況

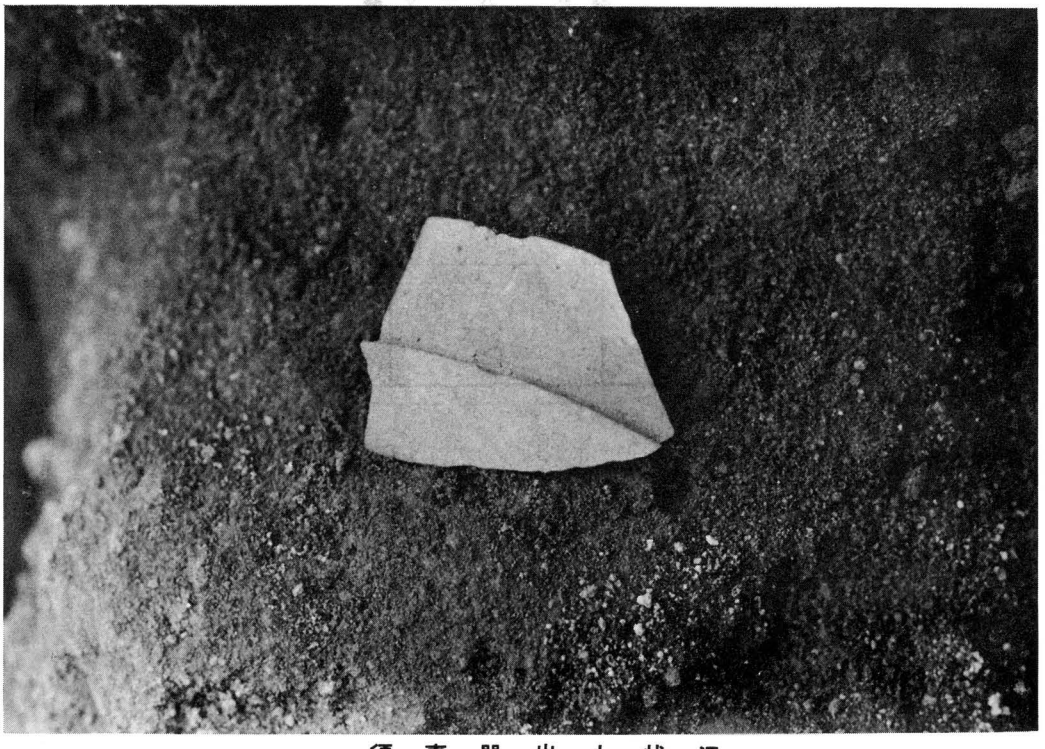


凹　石　出　土　状　況

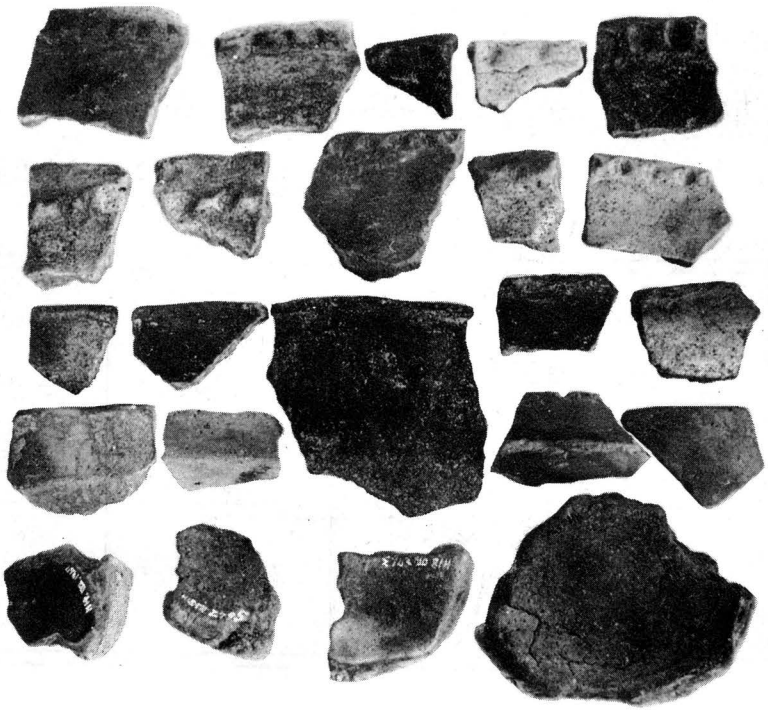
図版 4



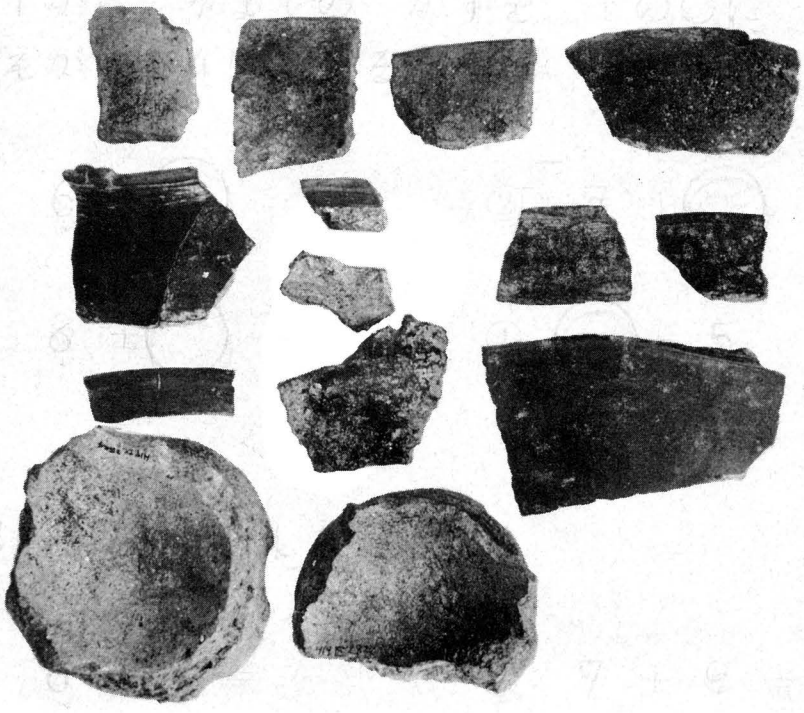
石　斧　出　土　状　況



須　恵　器　出　土　状　況



縄　文　土　器　(1)

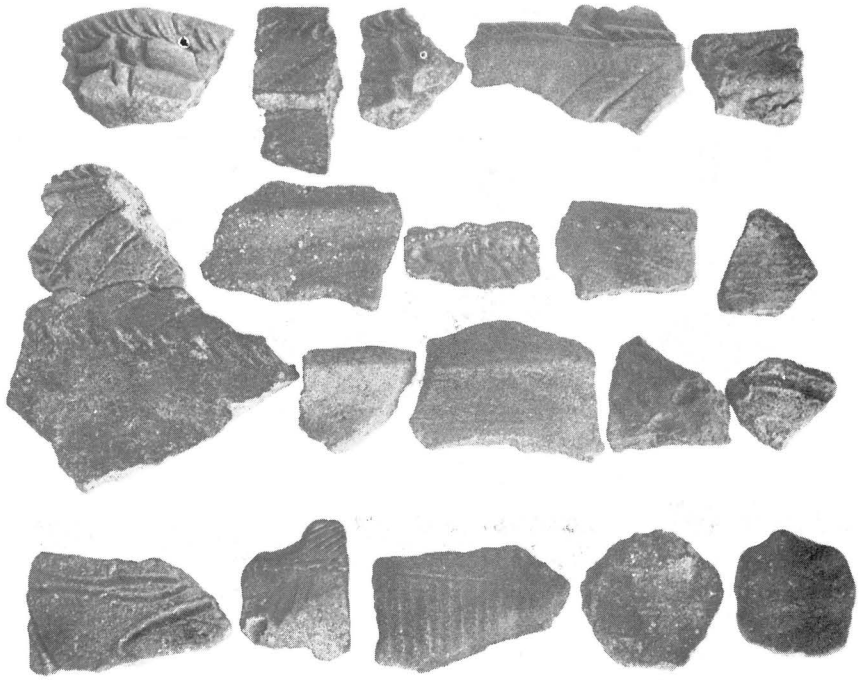


縄　文　土　器　(2)

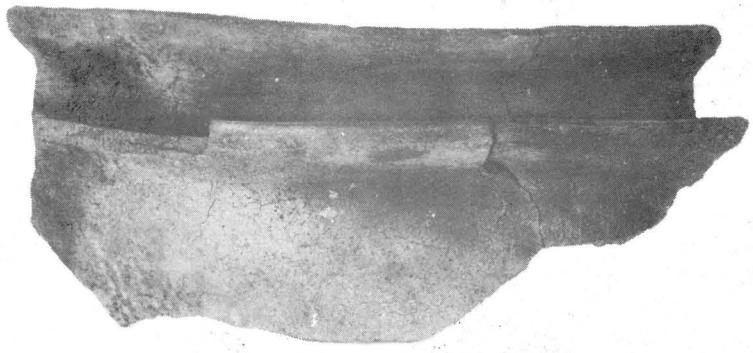
図版 6

縄文土器〔浅鉢〕(3)

縄文土器〔深鉢〕(4)

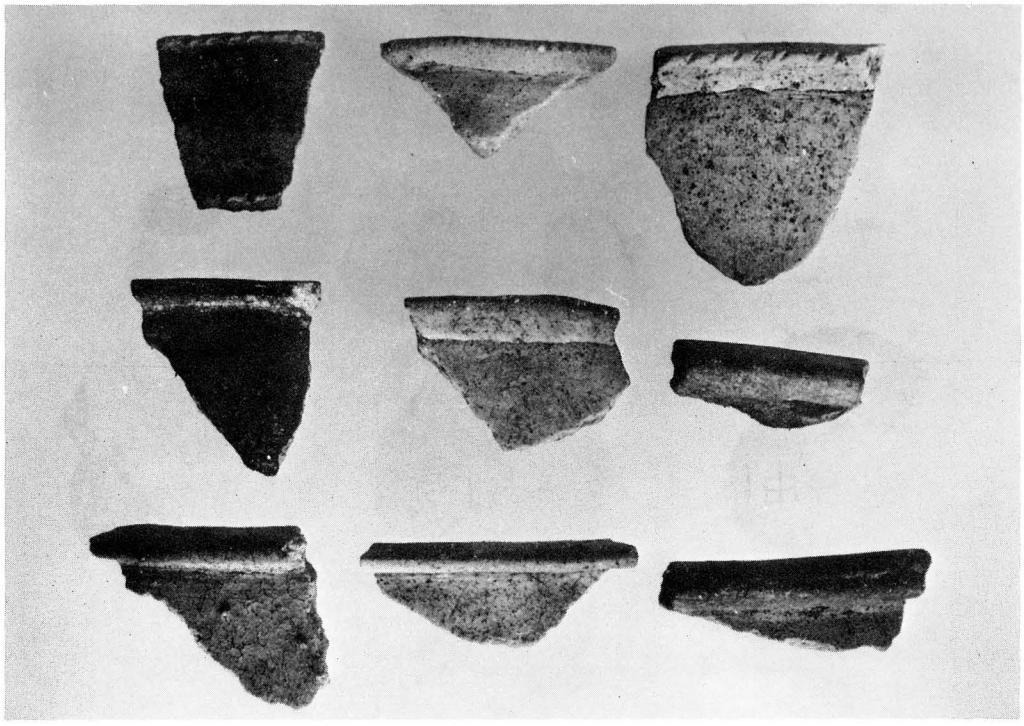


縄　文　土　器　(5)

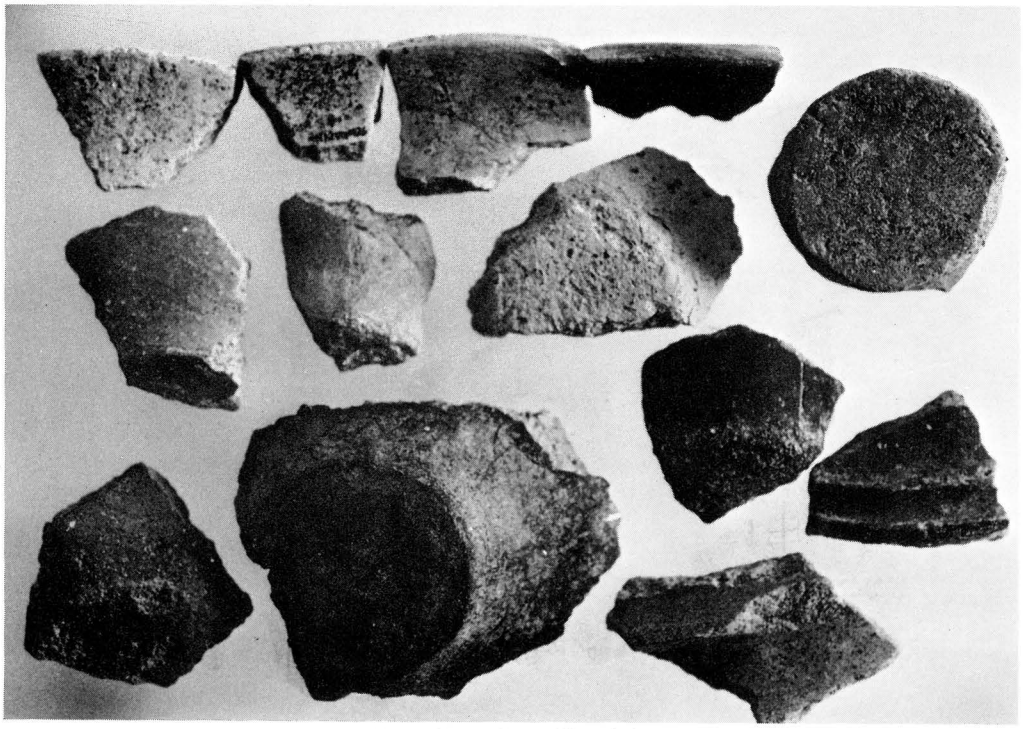


弥　生　土　器　(1)

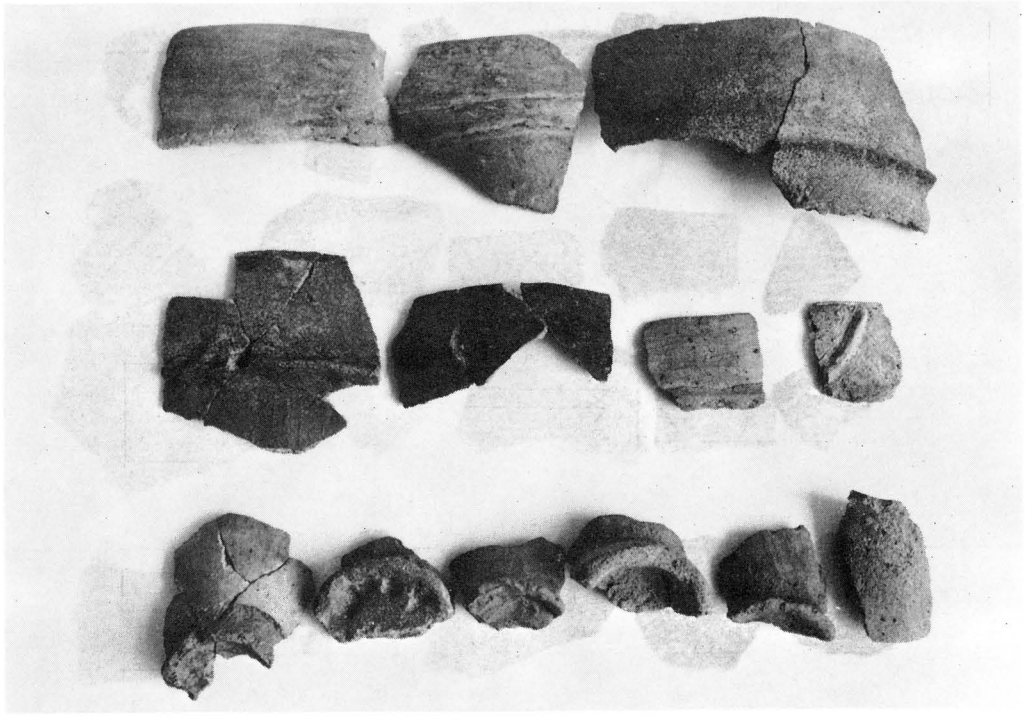
図版 8



弥　生　土　器　(2)



弥　生　土　器　(3)

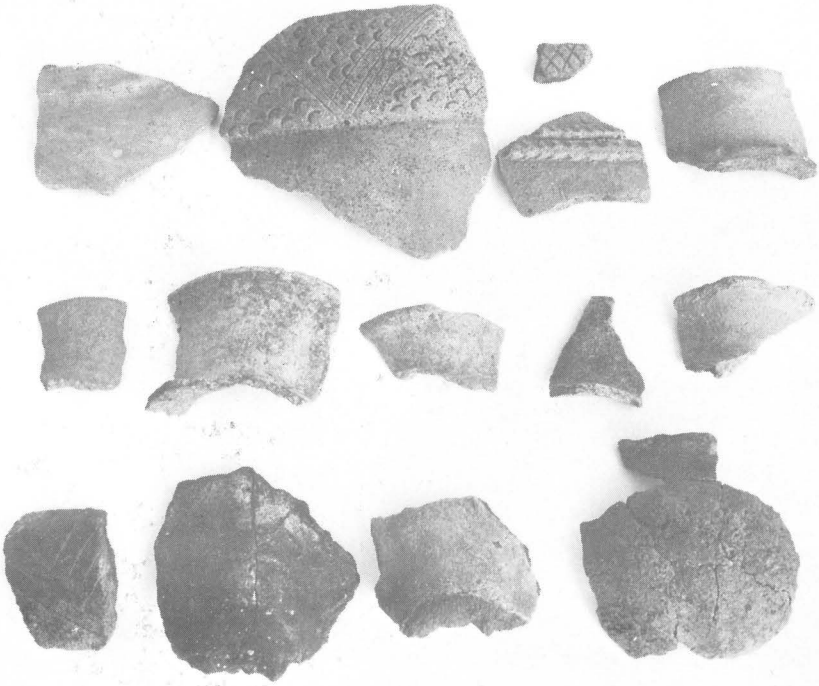


古墳・奈良時代の遺物　(1)

古墳・奈良時代の遺物　(2)

図版10

古墳・奈良時代の遺物　(3)

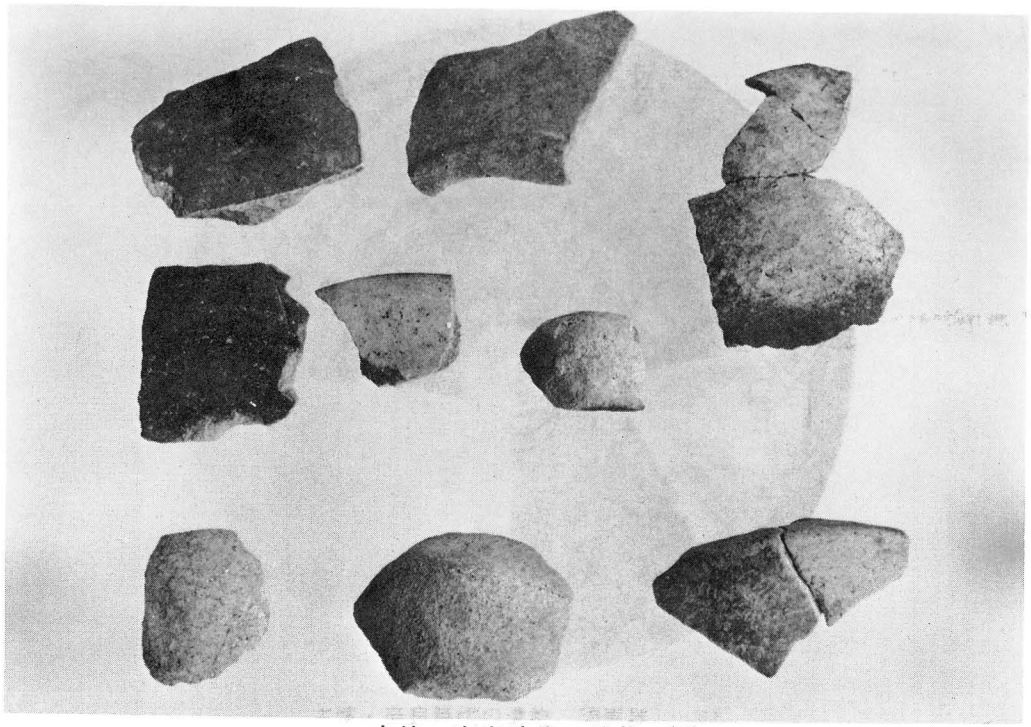


古墳・奈良時代の遺物　(4)

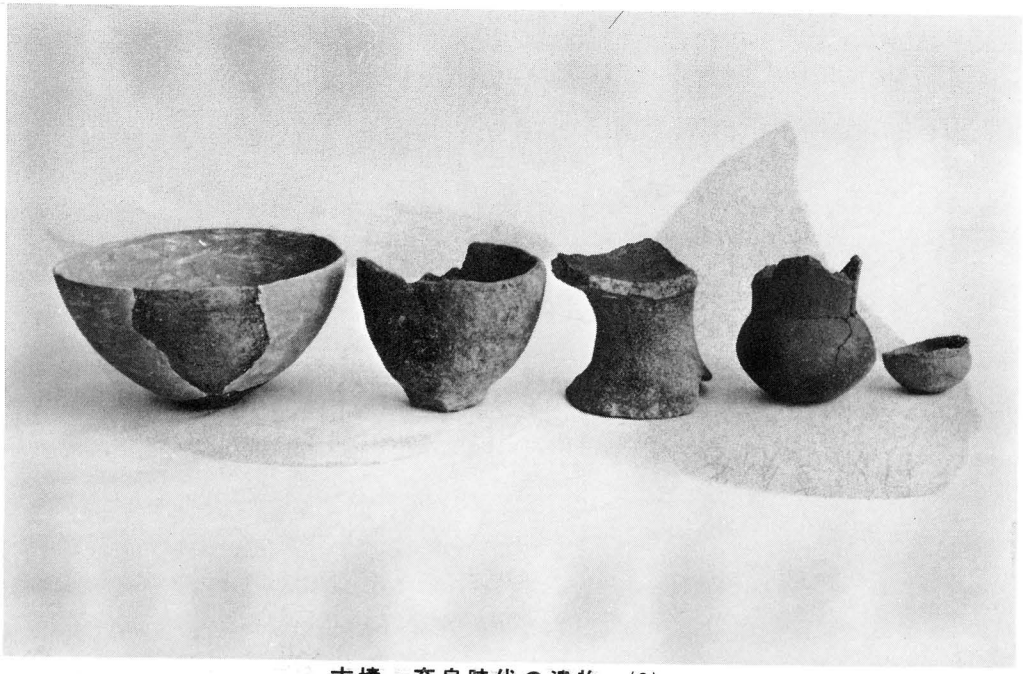
古墳・奈良時代の遺物　(5)

古墳・奈良時代の遺物　(6)

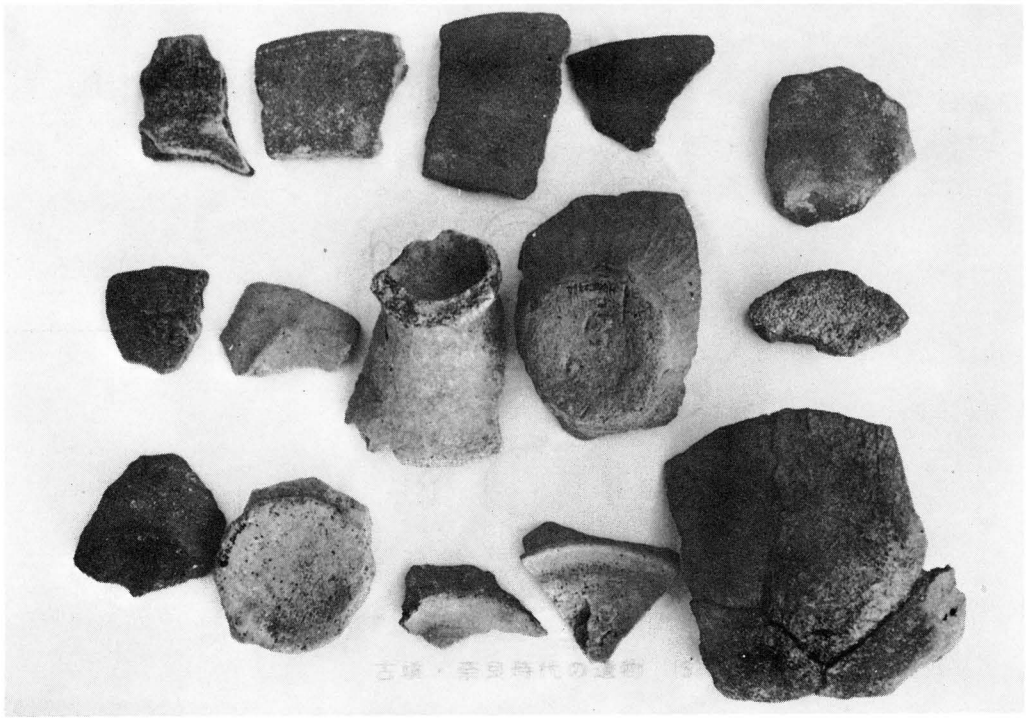
図版12



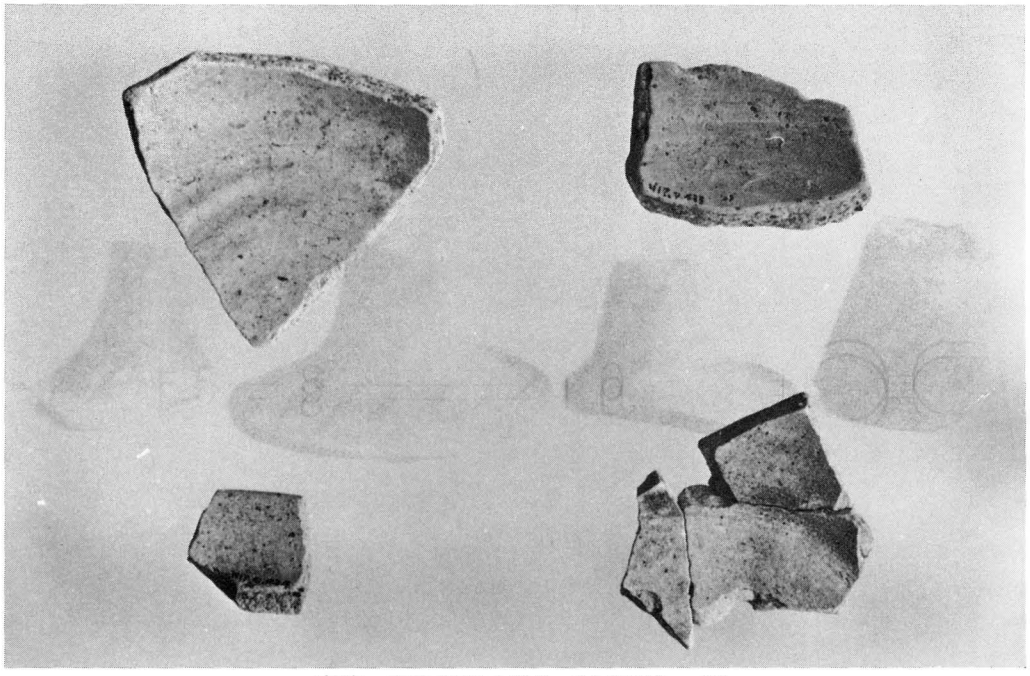
古墳・奈良時代の遺物　(7)



古墳・奈良時代の遺物　(8)



古墳・奈良時代の遺物　(9)

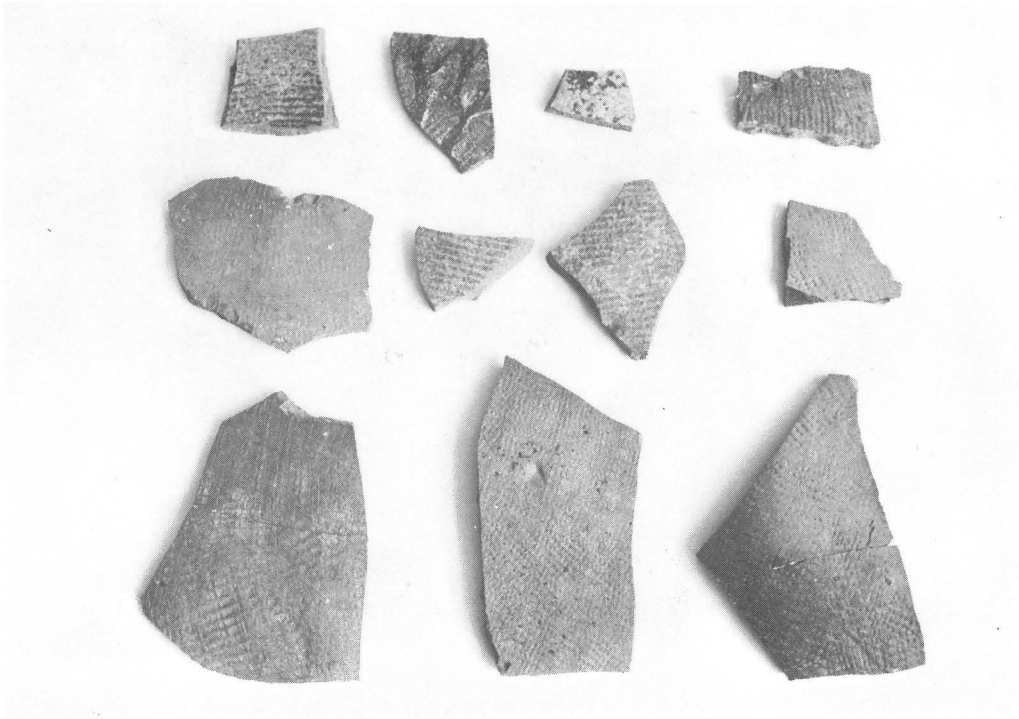


古墳・奈良時代の遺物〔土師器〕　(10)

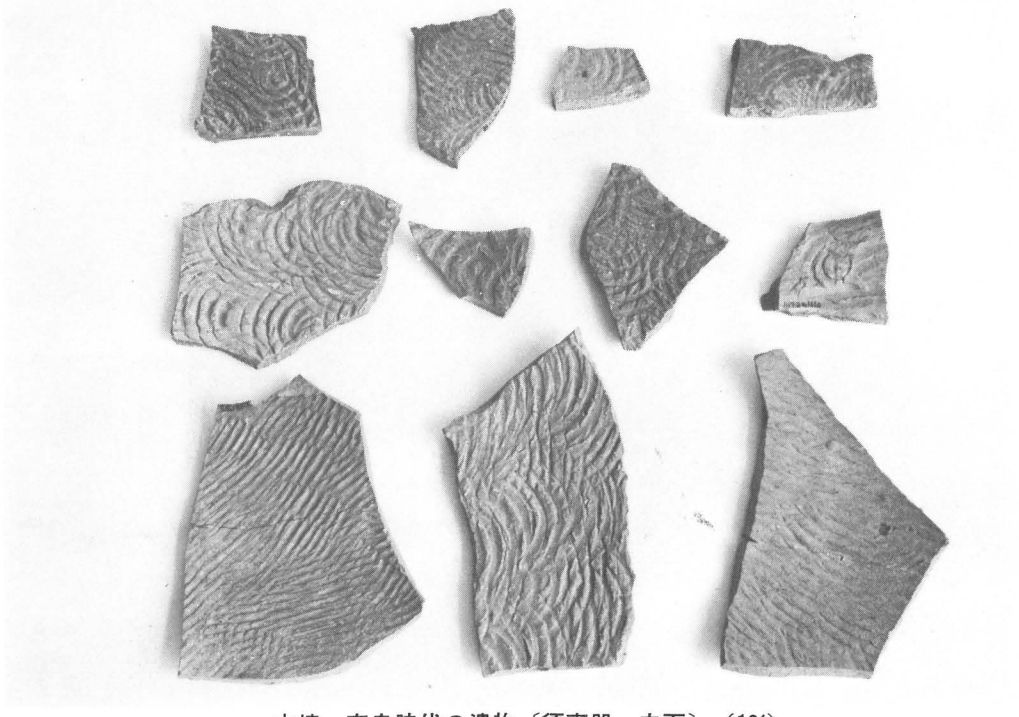
図版14

古墳・奈良時代の遺物〔須恵器〕 (11)

古墳・奈良時代の遺物〔須恵器〕 (12)

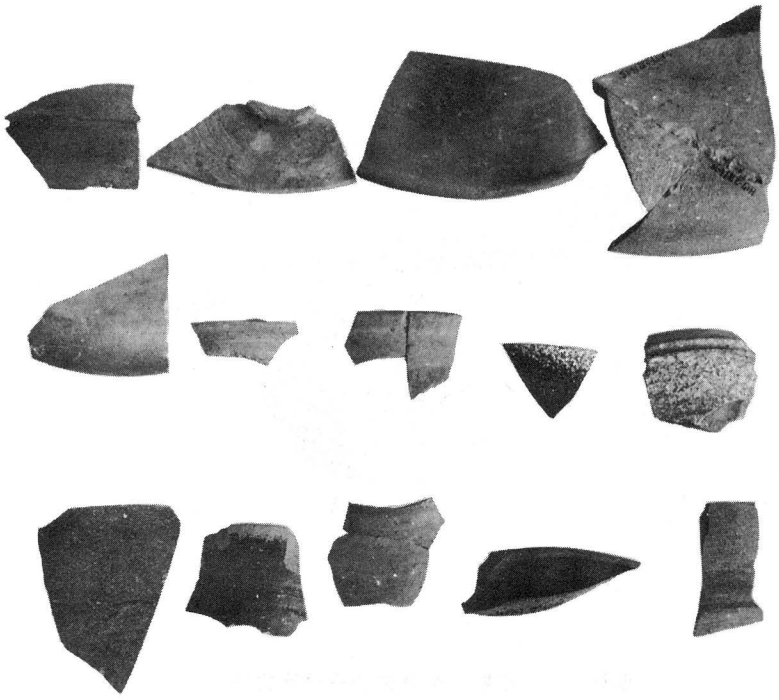


古墳・奈良時代の遺物〔須恵器－外面〕 (13)

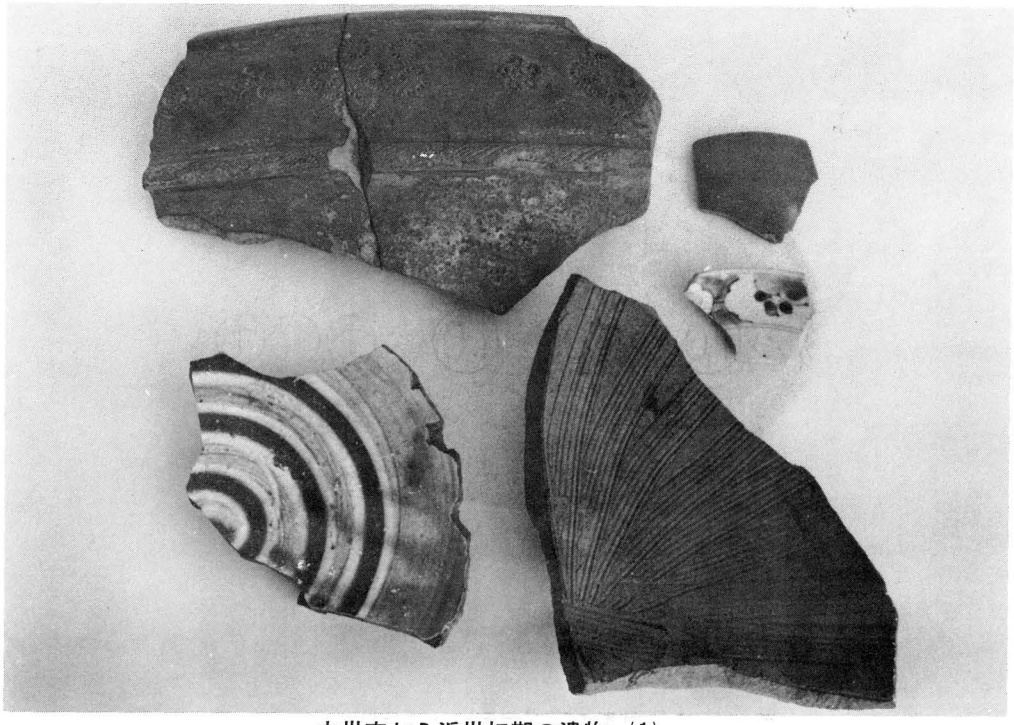


古墳・奈良時代の遺物〔須恵器－内面〕 (13′)

図版16

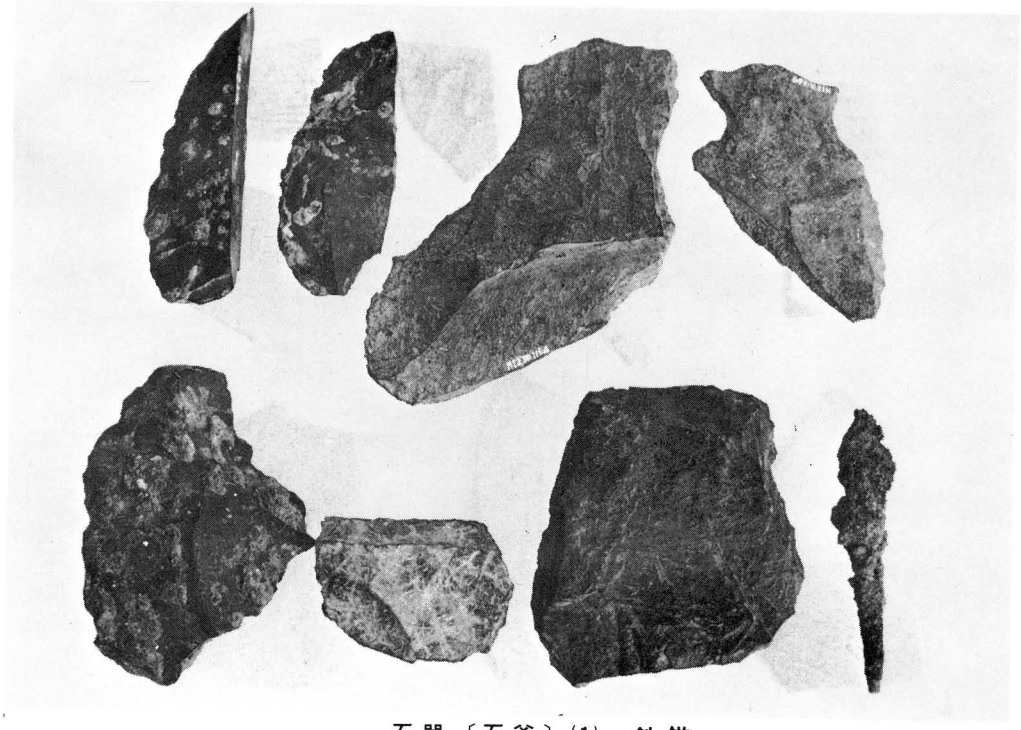


古墳・奈良時代の遺物〔須恵器〕 (14)

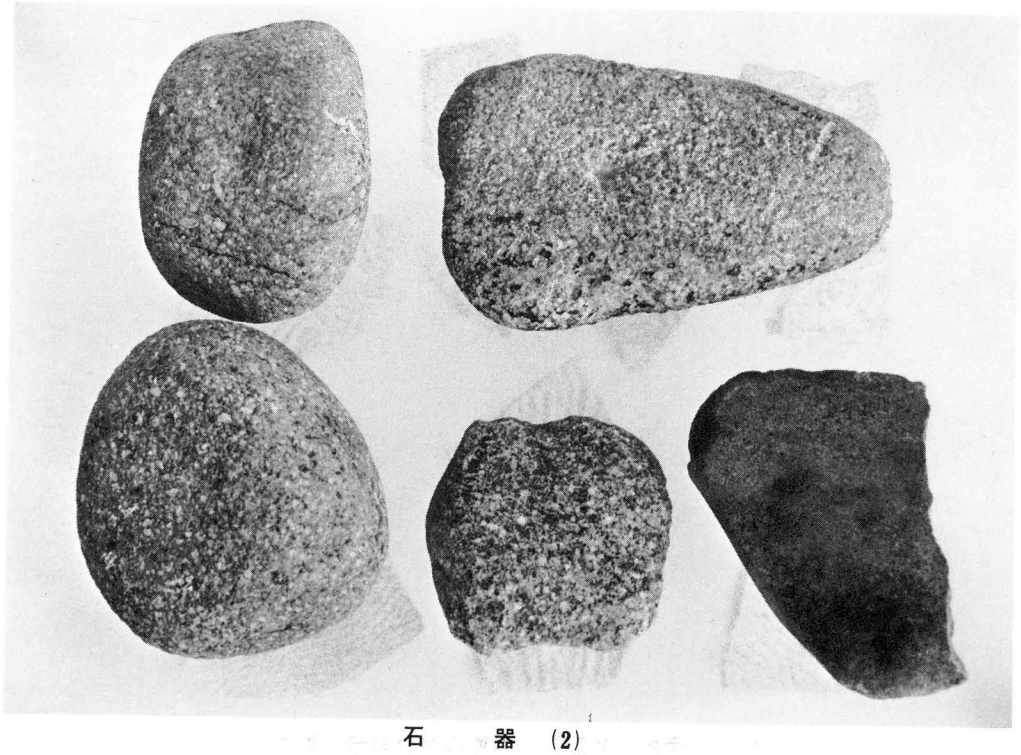


中世末から近世初期の遺物 (1)

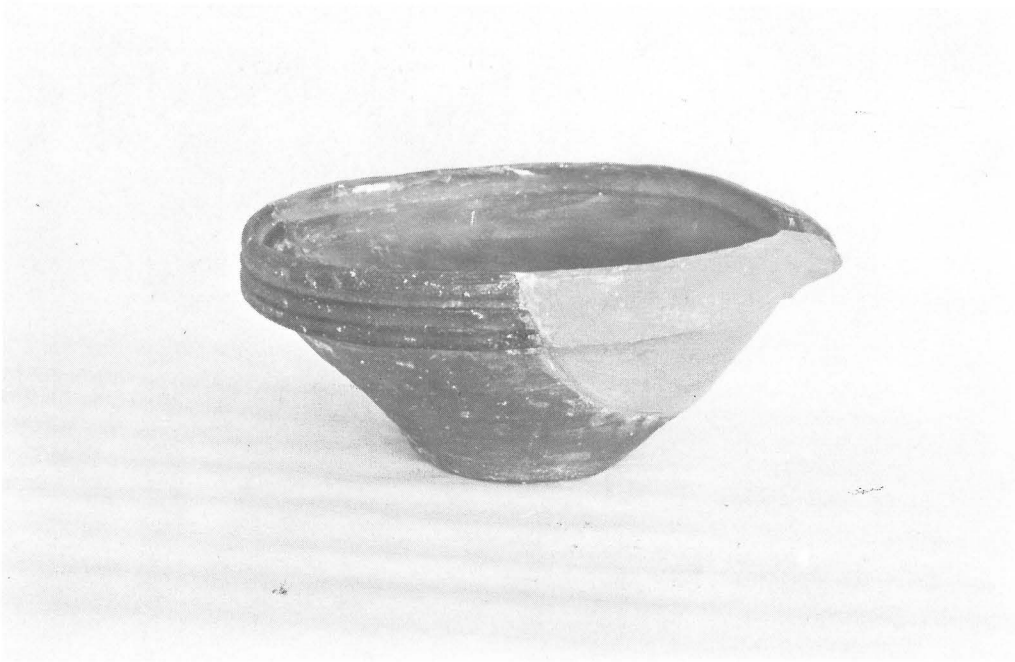
図版18



石器〔石斧〕(1)　鉄鏃



石　　器　(2)



中世末から近世初期の遺物 (2) 側面

中世末から近世初期の遺物 (2′) 上面